



平成27年度採択文部科学省
「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」

わかやまの未来を切り拓く若者を育む“紀の国大学”の構築

平成30年度 事業成果報告書

平成31年3月

紀の国大学

は じ め に

平成 27 年度の文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に、和歌山大学を事業主体とした「わかやまの未来を切り拓く若者を育む“紀の国大学”の構築」が採択されました。

本事業では、和歌山県内の高等教育機関の力を結集するとともに、隣接する大阪府内の総合大学、及び和歌山県をはじめとする県内自治体、県内の企業・金融機関が協力して“紀の国大学”を構築し、地域の人々・企業・自治体を元気にする人材、地元で活躍できる人材の育成を目指しております。

平成 28 年 4 月にスタートいたしました“紀の国大学”では、和歌山県の施策である「和歌山県まち・ひと・しごと創生総合戦略」に対応させた、県の強みを活かす 4 つの教育テーマ（①6 次産業化②商品・技術開発③移住先進地の再興④命と生活のインフラ）を設定し、地元就職、雇用創出、定住人口の増加に寄与するための教育プログラム「わかやま未来学副専攻」を導入し、県下全域でフィールド型講義を展開する取り組みを行って参りました。

このたび、これらの取り組みにつきまして、平成 30 年度における COC+事業成果報告書を発刊することになりました。

“紀の国大学”の取り組みが皆様のご参考になれば幸いです。

COC+事業を進めるにあたり、地域の皆様の多大なるご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げますとともに、今後とも引き続きご支援・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



紀の国大学協議会 会長
和歌山大学 第 16 代学長

瀧 寛和

目次

1.事業概要.....	3
【1】文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の説明	3
【2】紀の国大学の事業概要	3
(1) 紀の国大学	3
(2) 実施体制	5
2.教育プログラム開発部門.....	8
【1】カリキュラム.....	8
(1) 紀の国大学認定制度～わかやま未来創造人～の創出	8
(2) わかやま未来学副専攻プログラム構成.....	9
【2】地域連携・創業支援	13
(1) インターンシップの取り組み実績	13
(2) 創業支援の取り組み	16
(3) 創業支援ファンド設立に向けた取り組み	19
3.事業評価・FD 部門	20
【1】事業評価.....	20
(1) 事業協働機関による内部評価	20
【2】学生自主演習合同研修	21
4.わかやま未来学副専攻に関するアンケート	22
【1】めざす人材像.....	22
【2】わかやま未来学副専攻ルーブリック	23
【3】授業アンケートの分析・評価	24
5. 紀の国大学参加校の取り組み.....	35
【1】参加校の教育プログラム.....	35
【2】平成 30 年度の取り組み	45

1.事業概要

【1】文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の説明

■目的

地域で活躍する人材の育成や大学を核とした地域産業の活性化、地方への人口集積等の観点からは、地方大学が果たす役割に、極めて大きな期待が寄せられている。

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」は、平成 25 年度からの「地域のための大学」として、各大学の強みを生かしつつ、大学の機能別分化を促進し、地域再生・活性化の拠点となる大学の形成に取り組んできた「地（知）の拠点整備事業（COC 事業）」を発展させた事業であり、地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先を創出・開拓するとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取り組みを支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的とする。

■事業実施者

文部科学省

■事業対象

国公立大学・高等専門学校及び関係団体

■事業期間

平成 27 年度から平成 31 年までの 5 年間

■採択

平成 27 年度は、各大学より 56 件の申請があり、42 件採択
（参画する大学は、延べ 256 校）

【2】紀の国大学の事業概要

（1）紀の国大学

■事業名

わかやまの未来を切り拓く若者を育む“紀の国大学”の構築

■事業実施機関

和歌山大学

■事業協働機関

参加大学	大阪市立大学・大阪府立大学・摂南大学 和歌山工業高等専門学校・和歌山信愛女子短期大学
参加自治体	和歌山県
参加企業等	紀陽銀行・和歌山県経営者協会 和歌山県中小企業団体中央会
協力大学	関西大学・近畿大学・和歌山県立医科大学

■目的

和歌山県の深刻な地域課題に向き合いつつ、秀逸な自然環境と文化資源を活かしながら、わかやまの未来を切り拓く若者を育むとともに、新たな雇用を創出し、地域への定着を図ることにより和歌山県域における地方創生に貢献することを目的とする。

■概要

事業実施のために和歌山県全域をキャンパスとするネットワーク大学「紀の国大学」を、県内大学・高専と大阪府内のCOC採択の総合大学及び和歌山県、県内企業等の参画を得て構築する。地域の力を借りて地域の課題に即した実践的なキャリア教育プログラム（協働教育）を紀の国大学として展開する。和歌山県まち・ひと・しごと創生総合戦略から、大学が貢献できる4つのテーマ：**6次産業化／商品・技術開発／移住先進地の再興／命と生活のインフラ**を柱に定め、教育プログラムを構築する。また、4つのテーマを**ブランディング**が貫く。いずれのテーマにおいても顧客の求める価値を高めることを意識しつつ実践的な教育を体験することで**地元就職増**を果たし、協力する企業等が成長することで雇用創出増を生み、地域の魅力が高まることで移住者も増加し、次第に**定住人口増**に至る。

そのために、和歌山大学では、地域と協働で実践力を鍛える地域協働自主演習及び就職を意識した実践型インターンシップからなる全学共通の副専攻制度である「**わかやま未来学副専攻**」を新設し、1年次より地域を体験する学修を行うとともに、社会人の県内へのUターン・Iターンに資するため、再チャレンジコース「**わかやま未来塾**」を新設する（将来）。また、和歌山大学から郷土を見つめ郷土への愛着を育む「わかやま」学群を事業協働機関の各大学・高専（以下、COC+参加校）に提供する。さらに、和歌山大学及びCOC+参加校間で県内各地のフィールドを互いに開放し共同教育を行うことで、地域での学生の活動を拡大する。この事業全体を支える組織として「紀の国大学協議会」を設立し、COC+推進コーディネータの下で運営管理するとともに、その成果を県内に広く伝えることが本事業の目的である。

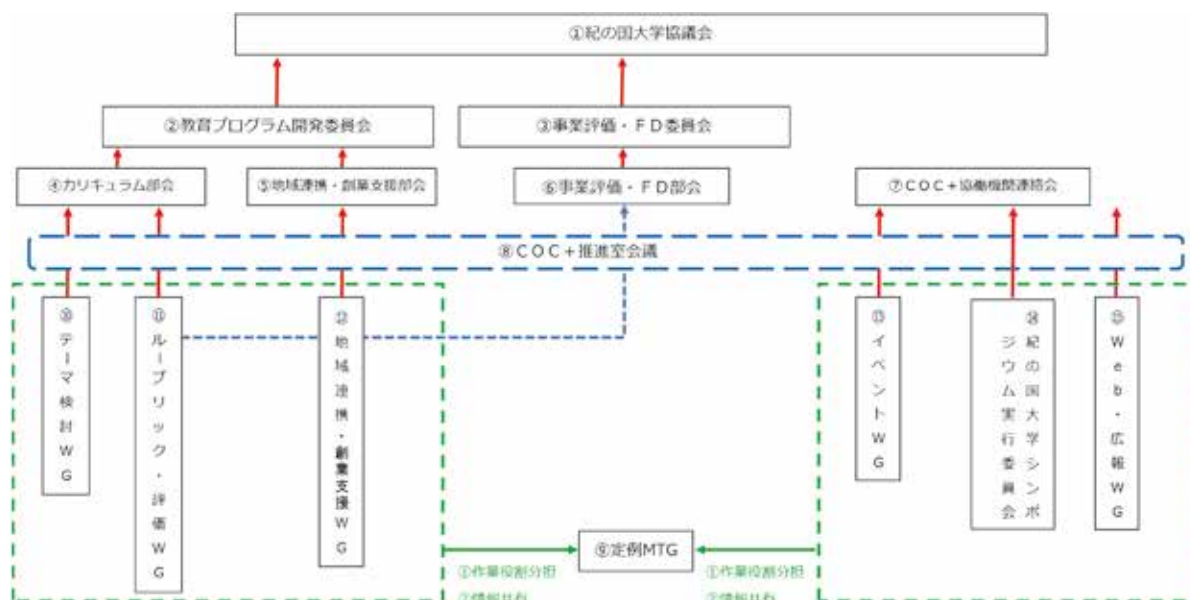
(2) 実施体制

①地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）の連携体制



②紀の国大学の実施体制

■紀の国大学組織体制



1.紀の国大学協議会

紀の国大学協議会は、和歌山県における地方創生に関して、雇用創出・若者定着に係る事業を推進することにより、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展を実現するため、必要な事項について協議することを目的とする。

(協議事項)

- (1) 地域を担う人材育成に関すること。
- (2) 学生の県内定着率の向上に関すること。
- (3) 地域の雇用創出に関すること。
- (4) その他、地方創生の実現に関すること。

2.教育プログラム開発委員会

(審議事項)

- (1) 地域を担う人材を育成するための教育プログラムの開発に関すること。
- (2) 地域と連携した雇用創出及び学生の創業支援に関すること。
- (3) その他、地方創生のための教育プログラムの開発に関すること。

3.事業評価・FD 委員会

(審議事項)

- (1) 紀の国大学協議会が実施する事業の評価に関すること。
- (2) 紀の国大学協議会の開発した教育プログラムに係るファカルティ・ディベロップメントに関すること。
- (3) その他、紀の国大学協議会の評価及びファカルティ・ディベロップメントに関すること。

4.カリキュラム部会

5.地域連携・創業支援部会

6.事業評価・FD 部会

■和歌山大学（紀の国大学事務局組織体制）

7.COC+協働機関連絡会

8.COC+推進室会議

9.定例 MTG

10. テーマ検討 WG

11. ルーブリック・評価 WG

12. 地域連携・創業支援 WG

13. イベント WG

14. Web・広報 WG

2.教育プログラム開発部門

【1】カリキュラム

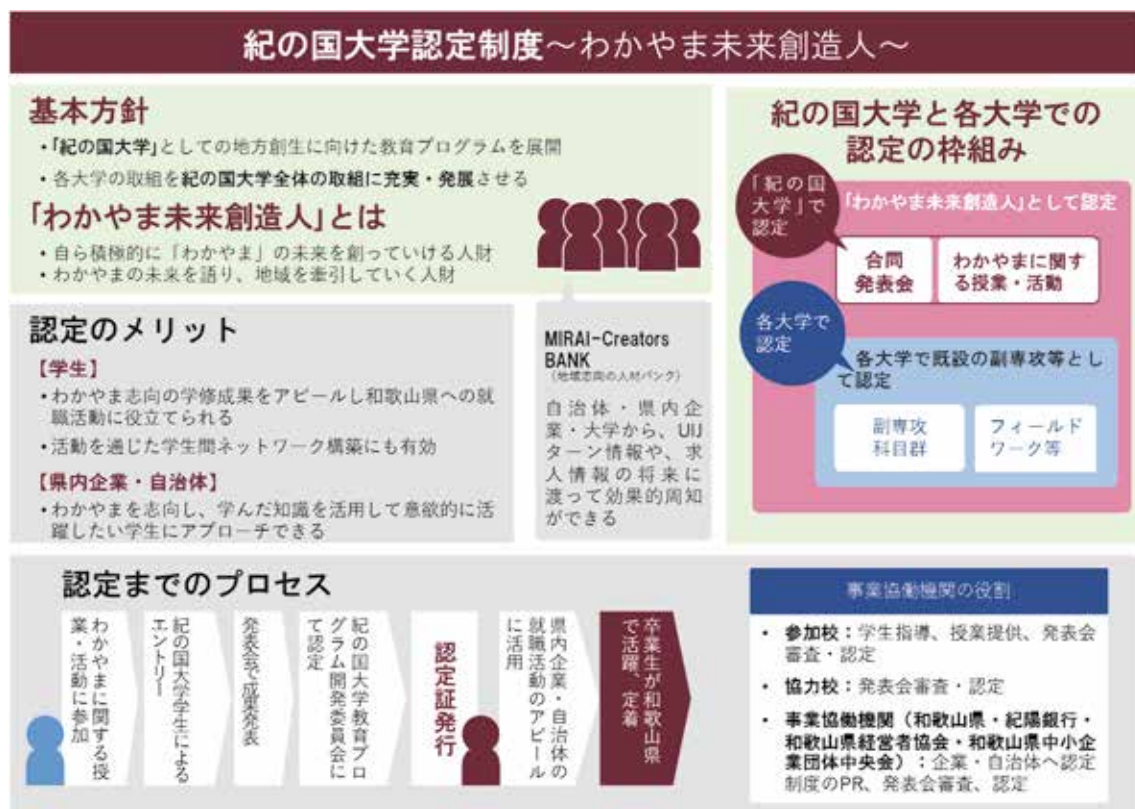
(1) 紀の国大学認定制度～わかやま未来創造人～の創出

わかやま未来創造人

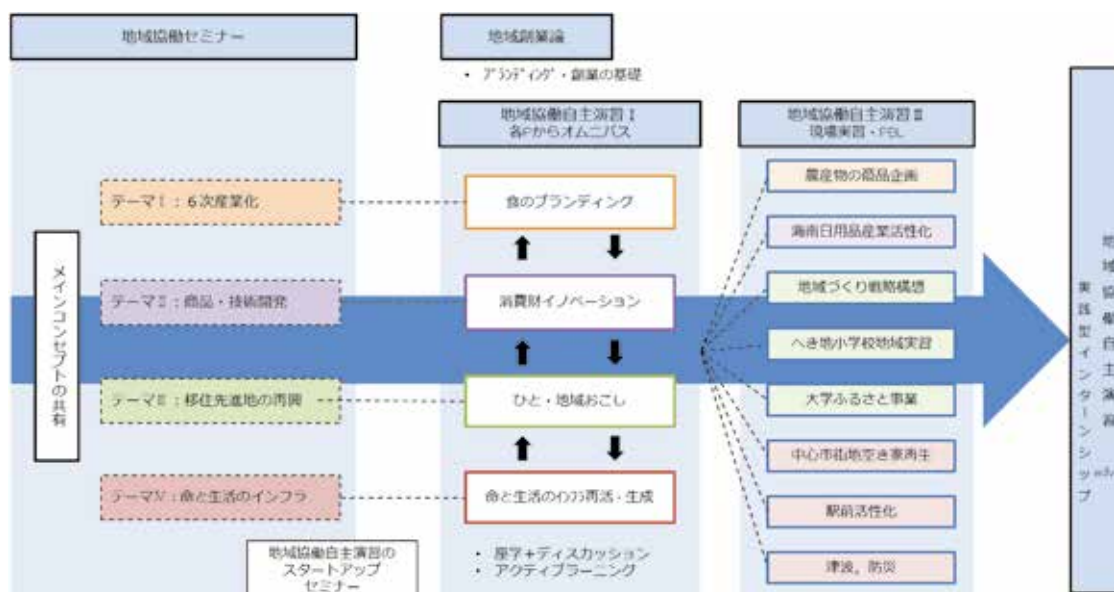
■目的

自ら積極的に「わかやま」の未来を創っていける人財および「わかやま」の未来を語り、地域を牽引していく人財を育成し、「わかやま」の地方創生に貢献することを目的とし、紀の国大学の認定制度を設ける。

平成 31 年 2 月 27 日(水)に行われた紀の国大学合同発表会にて、今年度初めて認定を行った。初年度の認定は 42 名。



(2) わかやま未来学副専攻プログラム構成



①地域協働セミナー（1年生後期）

【概要】

わかやま未来学副専攻の導入科目として、和歌山県の「しごと」「ひと」「まち」に関する概要を知る講義。和歌山県の地方都市・地域社会が抱える多様かつ複合的な課題を理解し、その解決に取り組むための基礎知識を学ぶ。副専攻の4つのテーマ「6次産業化」「商品・技術開発」「移住先進地の再興」「命と生活のインフラ」に沿って、それぞれの課題に取り組む様々な立場の方（ゲストスピーカー）から生の話を聞く。現状と課題、そして今後の可能性を学び、それらに自らがいかに関与していくことができるかを考える。

【受講状況】

・受講者数

学部別	人数	比率
教育学部	11	4.0%
経済学部	81	29.5%
システム工学部	111	40.4%
観光学部	72	26.2%
総計	275	100.0%

学年別	人数	比率
1年生	228	82.9%
2年生	27	9.8%
3年生	16	5.8%
4年生	4	1.5%
総計	275	100.0%

・単位取得人数

学部別	人数	比率
教育学部	9	3.6%
経済学部	76	30.3%
システム工学部	99	39.4%
観光学部	67	26.7%
総計	251	100.0%

学年別	人数	比率
1年生	215	85.7%
2年生	25	10.0%
3年生	10	4.0%
4年生	1	0.4%
総計	251	100.0%

【授業内容】

平成 30 年度

回	テーマ	講師（実務家教員）
1	オリエンテーション	
2	各テーマの概要とコンセプトマップ	
3	郷土愛と地域を支える人材育成	豊田教員（教職大学院）
4	地方創生と和歌山県の課題	安川真理 （和歌山県 企画総務課 班長）
5	地場産業をプロデュースする－家庭用品産業とその 振興	角谷太基 （株式会社サンコー 代表取 締役）
6	地場産業をプロデュースする－家庭用品メーカーの 奮闘	高田大輔 （株式会社コーゾー 高田耕 造商店）
7	農の可能性を拓く－和歌山県の農林水産業と 6 次産 業化	立石 修 （和歌山県農林水産総務課 副課長）
8	農の可能性を拓く－革新的農業法人の取組	児玉典男 （有限会社柑香園 観音山フ ルーツガーデン）
9	固定概念にとらわれないキャンパスライフ	小川陽也 （和歌山大学システム工学部 3 年生）
10	中間振り返り	
11	まちなかで暮らしをつくる－空き家対策と活用に向 けた新たな試み	島村健司 （（一社）ミチル空間プロジ ェクト 理事）
12	地域資源である星空を生かした観光の取組	角田夏樹 (star forest)
13	文化財を生かしたまちづくり－九度山の取組	山本新平 （九度山町教育委員会・専門 調査員）
14	わかやまで創業する－創業事例と支援の取組	中村雅章（紀陽銀行 地域振 興部 地域活性化室）
15	全体の振り返り	

②地域協働自主演習Ⅰ（2年生前期）

【概要】

わかやま未来学副専攻科目として、和歌山県の各地域が抱える課題を事例としたグループワークを中心とする講義で、平成29年度から開講した。和歌山県の地方都市・地域社会が抱える多様かつ複合的な課題を理解し、その解決策を自分たちの知恵をつかって提案する。副専攻では、4つのテーマ「6次産業化」「商品・技術開発」「移住先進地の再興」「命と生活のインフラ」を含む事例をとりあげる。地域で課題に取り組む様々な立場の方（ゲストスピーカー）からお話を聞き、現状と課題、そして今後の可能性を具体的に考えて提案する。グループワークは3回を1セットとして行い、講義を通じて4つの事例に取り組む。

【受講状況】

・受講者数

学部別	人数	比率
教育学部	3	4.0%
経済学部	16	21.3%
システム工学部	5	6.7%
観光学部	51	68.0%
計	75	100.0%

・単位取得人数

学部別	人数	比率
教育学部	1	33.3%
経済学部	16	100.0%
システム工学部	3	60.0%
観光学部	48	94.1%
計	68	90.7%

【授業内容】

回	内容
1	オリエンテーション
2	Aターム 「6次産業化や家庭用品などの商品企画」 各テーマ（課題）説明、希望テーマ選択
3	Aターム テーマ・チーム分け、企画（マーケティング）の考え方
4	Aターム グループワーク（企画提案に向けた調査・検討）
5	Aターム グループワーク（企画提案に向けた調査・検討）
6	Aターム グループワーク（企画提案に向けた調査・検討）
7	Aターム プレゼンテーション（各チームの企画提案）
8	中間ふりかえり
9	Bターム 「わかやまの地域プロモーション」 テーマ（課題）説明、チーム分け
10	Bターム グループワーク（企画提案に向けた調査・検討）
11	Bターム グループワーク（企画提案に向けた調査・検討）
12	Bターム グループワーク（企画提案に向けた調査・検討）
13	Bターム グループワーク（企画提案に向けた調査・検討）
14	Bターム プレゼンテーション（各チームの企画提案）
15	全体のふりかえり

③地域協働自主演習Ⅱ（2年生後期）

【概要】

わかやま未来学副専攻科目として、和歌山県の各地域が抱える課題を対象としたフィールドワークを中心とする授業で、平成29年度から開講した。副専攻の4つのテーマ「6次産業化」「商品・技術開発」「移住先進地の再興」「命と生活のインフラ」に基づいて提供される複数のプロジェクトから一つを選択し、それぞれの地域（分野）において、課題発見から解決策を見いだすまでの一連のプロセスを実践的に学ぶ演習科目である。

【受講状況】

・受講者数

・単位取得人数

学部別	人数	比率
教育学部	0	-
経済学部	14	26.9%
システム工学部	2	3.8%
観光学部	36	69.2%
総計	52	100.0%

学部別	人数	比率
教育学部	0	-
経済学部	14	100.0%
システム工学部	2	100.0%
観光学部	36	100.0%
総計	52	100.0%

【プロジェクト】

プロジェクト名	実施地域	担当教員	受講者数
6次産業化実践	紀の川市 海南市	木村亮介（クロスカル教育機構教養・協働教育部門講師）	9人
家庭用品イノベーション	海南市	藤田和史（経済学部准教授）	1人
地域づくり戦略構想	紀の川町	大浦由美（観光学部教授）	2人
地域資源を生かした生業づくりとまちづくり	九度山町	宮川智子（システム工学部教授）	6人
地方都市のまちなか再生	和歌山市	永瀬節治（観光学部准教授）	10人
宿泊業を中心とした着地型観光ビジネス	かつらぎ町	木村亮介（クロスカル教育機構教養・協働教育部門講師）	9人
美しい星空を活かした観光	みなべ町 紀美野町	尾久土正己（観光学部教授）	10人

④地域協働自主演習 Adv. (3年生通年)

和歌山県内の民間企業・自治体・NPO 団体等で行う実践型インターンシップです。これまでの学修の成果を踏まえ、それぞれの現場での実践に応用する力を養う。この演習は、わかやま未来学副専攻科目の総仕上げの演習である。具体的には、実践型インターンシップを通じて、各テーマ・プロジェクトに沿って和歌山県の現状・課題・可能性を理解したうえで、それらに自らがいかに関与していくことができるかを考え、提案することを目指す。

・受講者数

	人数	比率
教育学部	0	0.0%
経済学部	10	35.7%
システム工学部	5	17.9%
観光学部	13	46.4%
総計	28	100.0%

・単位取得人数

	人数	比率
教育学部	0	—
経済学部	9	90.0%
システム工学部	5	100.0%
観光学部	12	92.3%
総計	26	92.9%

【2】地域連携・創業支援

(1) インターンシップの取り組み実績

①和歌山県経営者協会を通じた和歌山県内企業・団体へのインターンシップ参加学生数

学校名	H25	H26	H27	H28	H29	H30	合計
和歌山大学	87	54	63	48	59	41	352
和歌山信愛女子短期大学	30	38	35	49	48	36	236
和歌山工業高等専門学校	71	46	57	56	37	43	310
大阪市立大学	3	1	3	4	1	1	13
大阪府立大学	2	1	1	3	2	1	10
摂南大学	0	0	1	1	1	6	9
合計	193	140	160	161	148	128	930

②実践型インターンシップ（和歌山大学）

No.	実習先名	実習テーマ
1	橋本市（経済推進部）	地場産業・地域農業の競争力強化のための調査研究
2	岩出市役所 事業部 産業振興課	岩出市への観光客誘致のための施策を考える
3	田辺市役所	田辺市・和歌山大学連携事業「大学生みらいサポート事業ロカリアル」の企画・運営補助
4	有田川町役場	
5	NPO 法人和歌浦湾海業	和歌浦のまちづくり、魅力向上
6	南海電気鉄道株式会社 和歌山支社	沿線価値の上昇のための着地型観光プログラムの開発
7	株式会社 sasquatch（サスカッチ）	①イベント運営（kisssh-Kissssssh 映画祭など） ②まちづくり業務 ③新しいコンテンツづくり
8	有限会社あんちゃん	お客様、旅行会社に受け入れられる日帰り旅行、料理、お土産を企画し、現在の観光業の実状と課題の研究
9	農業法人株式会社秋津野（都市と農村の交流施設 秋津野ガルテン）	『援農からはじまる都市農村交流』グリーンツーリズム施設（秋津野ガルテン）を拠点に他大学の学生と共に滞在し、地域内の農家に出向き農作業（援農）することで、農家と交流しながら農村の現状と農業の現場について学ぶ。
10	紀ノ川農業協同組合	農業の担い手不足問題に取り組む 都市住民と地域がつながる機会をつくる
11	株式会社とち亀物産	古民家再生によるゲストハウス事業運営 ／ ネットショップ運営
12	有限会社柑香園（観音山フルーツガーデン）	進化する農業と地方活性化を体験し学び、考え、行動する
13	株式会社早和果樹園	～川上から川下まで～ 6次産業を体感しよう！
14	株式会社たがみ（熊野米）	地域の食材をブランディングする「熊野米」プロデュース
15	株式会社吉田（和歌山麦酒醸造所 三代目）	和歌山市初の地ビールブランドで和歌山らしい新たなビールを開発し、発信する
16	伊藤農園	made in WAKAYAMA の商品を世界へ広げよう！
17	ワノミライカ	梅を使った機能性食品の開発・マーケティング

18	株式会社たまゆらの里	宿泊リゾートの客増加策企画
19	株式会社むさし	「旅館むさしの人々(町外住)」取材・制作プロジェクト ／ 学生による学生のための宿泊プラン企画
20	櫻池院	外国人客が訪れる宿坊の宿泊業務を通じて学ぶ 【日本文化・旅館経営・英語コミュニケーション】
21	株式会社リゾート大島	アウトドアリゾートの運営と和歌山観光の潜在能力
22	株式会社わたらせ温泉	SNS 活用等による販売促進、マーケティング企画・実践
23	株式会社オーエ	
24	菱岡工業株式会社	製造現場の改善活動（課題発見～解決）
25	ワコン株式会社	日本の技術を世界へ伝える新商品の開発（免振パッケージ） ／ マーケティング・営業 実践
26	4D センサー株式会社	和大発の Global Tech Startup でインターン
27	glafit	電動ハイブリッドバイクのマーケティング, イベント出展
28	特定非営利活動法人 ジョ イ・コム	[障害福祉現場] とことわ (wakayama*chocolat toco*towa) 就 労支援サービスの提供と事業運営に関わる
29	株式会社たがみ (海の家 バルデガハマ)	南国ビーチで 海の家を経営する！
30	田原学園	「人」とのつながりの大切さを知る。

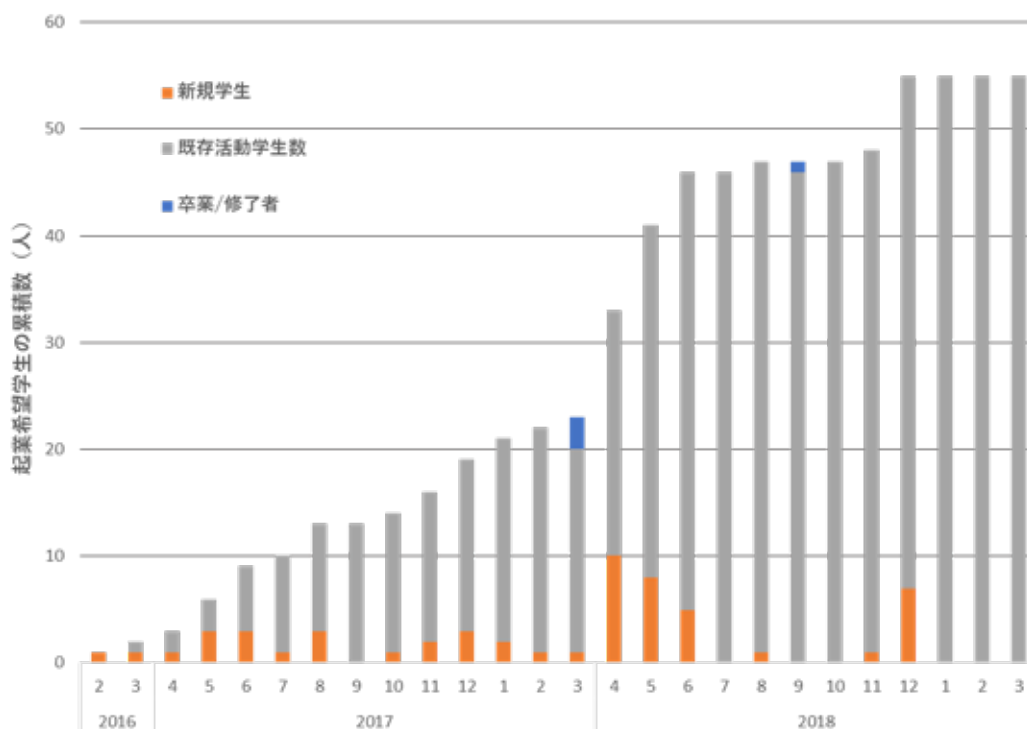
(2) 創業支援の取り組み

①在学学生への起業支援の現状

本学 COC+事業では事業協働機関雇用創出数 10 人を目標としている。このため平成 29 年度より、「和歌山大学在学学生への起業支援」を試行している。平成 29 年 4 月から、在学中の起業希望の学生、あるいは卒業後の進路のひとつとして起業を希望する学生（以下、「起業希望学生」という）に対して、相談・支援を行う「学生の起業・創業相談窓口」を COC+推進室内に設置した。

その結果、全学部、全学年から起業希望学生を見出すことができ、平成 31 年 3 月時点で 55 名（うち卒業 3 名、海外の大学への転学 1 名）を数える。特徴としては、学生数の多い経済学部とシステム工学部の学生が多く、学年は掘り起こしができた 1 年生が多く、男女比は男性 35 名、女性 16 名と男性が多い。

学年	教育学部	経済学部	システム工学部	観光学部	総計
B1	2	12	6	5	25
B2		3	1	2	6
B3		3	4	3	10
B4		1	2		3
M1			2		2
M2		2	3		5
卒業			2	1	3
転学 (海外)		1			1
総計	2	22	20	11	55



②起業支援の取り組み

起業支援を拡充・加速化させることを目的として、学内の「栄谷会館」を活用して起業希望学生らの起業活動拠点として試験運用を10月より開始した。

ここでは、起業希望学生らが主体的・自主的による起業プランの紹介や日々の活動を紹介し合う SAKAEDANI-presentation (通称 S-pre) (開催日 10/23、11/20、12/18、1/21) を開催するようになった。また、ここには学外から、学生と



交流したい地元企業や他大学の学生も参加するようになった。今後は、起業に興味のある学生らと、それを応援したい民間・行政などの和歌山圏域における拠点を目指していきたい。

その他の起業支援に関する取り組みには、以下がある。

- 和歌山県経営者協会「経営のコツを気づく会」と連携した学生のビジネスプラン発表会 & 交流会 (開催日 12/13、経営者 39 名、学生 6 名)
- 起業家・地域産業育成のための知的財産講演会 富士通セミコンダクター株式会社、産学連携イノベーションセンターと連携して知的財産権に関する全 3 回のセミナーを開催 (開催日 6/19、10/26、1/21)
- パテントアイデアソン 富士通セミコンダクター株式会社と連携して休眠特許を題材にしたアイデア発想法・思考法を学ぶセミナーを開催 (開催日 2/22、参加者 19 名)
- ビジネスプラン書き方講座 香村賞に合わせてビジネスプランの考え方や立て方を教えるセミナーを開催 (開催日 6/19、7/20、8/31)



12/13 ビジネスプラン発表会&交流会



2/22 パテントアイデアソン

③起業支援の実績（学生の受賞歴）

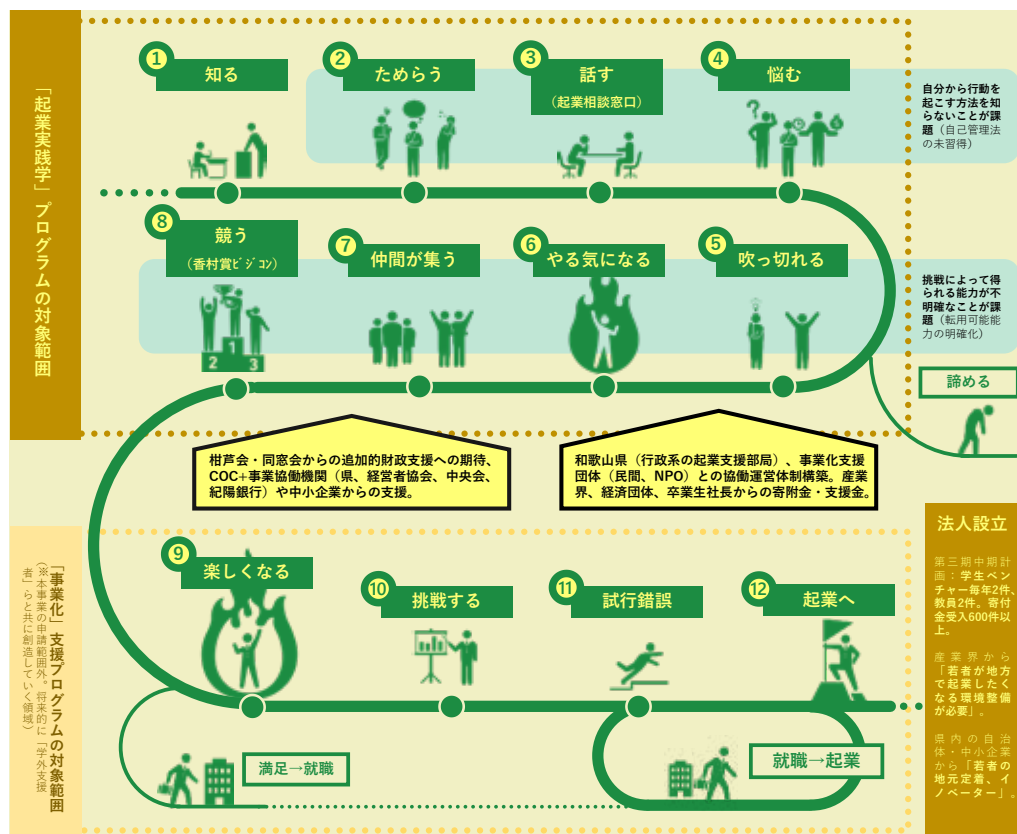
起業支援を本格化した平成 30 年度は、学外のビジネスプランコンテストにおいて起業希望学生ら 4 件の受賞があった。

- 経済学部 B1 久保友紀
第 1 回地域クラウド交流会 in 和歌山 優勝
第 4 回ビジネスプランコンテスト ビジネスプラン奨励賞
- 経済学部 B3 福間敬太
Red Bull Basement University 日本代表選出（優勝）
- 観光学部 B3 山中大河らチーム
アグリカルチャーコンペティション 審査員特別賞

④今後の取組について

平成 29 年度から起業支援の取り組みを試行、平成 30 年度から本格実施したことで、本学における起業希望学生が「どこでつまづきやすいか」「どこに不安を感じて行動できなくなるか」といった”支援のコツ”を押さえた教育プログラムを以下に 3 つ提案したい。

潜在的な起業希望学生が起業に興味を持ち、ビジネスプランを立案するまでの行程はおおよそ以下のようなものである。



挑戦したいビジネスプランをすでに持って相談に訪れる学生はほとんどいない。授業などを通して起業を知ったり、将来の選択肢のひとつとして漠然と興味関心を持つなどして、相談窓口に来ることさえ躊躇している学生も少なくない。また相談後でも、何をどう進めていけばよいか悩み、そのまま積極的な活動をしないまま諦め、就職する学生もいる。起業とは「会社を作ること」「すぐにお金を稼げないといけない」など誤った知識のままで、たとえば週末起業・副業・兼業などの選択肢があることを知らない。また、挑戦する前から成功する可能性を吟味されると考えてしまい、在学中に挑戦してから進路を判断してみるという考えに立てない学生が多い。つまり、起業支援の最初は、起業に関する誤った知識・漠然としたイメージを払拭して、1～5 にあたる挑戦のためのマインドセットを作ることが必要となる。

つぎに、挑戦の意欲が高まった後、具体的なビジネス課題を見つけられないことが多い。一生を掛けて挑戦する起業のテーマではなく、ひとまず練習、挑戦として行動してみるために「自分は何がやりたいのか」と悩む。また、好きなことややってみたいテーマがありすぎて絞り込めない学生も

いる。これは「考えを整理する能力」の欠如ではなく、これまでの経験でそうした自己分析をする機会に乏しく、その技法を知らないだけである。つまり、起業支援の2つ目としては、6～8 にあたるセルフマネジメントとトランスファラブルスキルの習得を中心としたスキル習得を促すとよい。



最後に、自分でビジネス課題を見つけ、考える力がついたら、あとは実際に試してみる機会が必要となる。ビジネスプランコンテストの受賞プランですぐに起業できるわけではない。そこから、実際に試してみながら、改良を加えていき、実社会では失敗したり、頓挫したり、様々なことが起こる。この段階では、制約の多い大学教育の一環としてできることは少なく、学外の民間事業者や起業家らから支援をいただきながら、具体的にビジネスプランを構築する支援が必要となる。

本学での起業支援は、おおよそ上記の3つから構成されるだろう。1～2つ目はすでに構築ができており、今後は3つ目の学外からの支援体制の構築が求められよう。

3.事業評価・FD 部門

【1】事業評価

(1) 事業協働機関による内部評価

■平成 30 年度地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）における大学以外の事業協働機関による事業への聞き取り調査の実施結果について

日時：平成 30 年 9 月 26 日（水）13：30～14：30

場所：和歌山大学経済学部 第 3 会議室

出席：紀陽銀行（地域活性化室）、和歌山県中小企業団体中央会

和歌山県（文化学術課）、和歌山県経営者協会

実施方法：

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）における大学以外の事業協働機関による事業への聞き取り調査実施要領」に基づき、COC+コーディネーター（総括）等が実施した。

実施内容：

・事業への満足度調査

事業評価・FD 委員会及び同部会において実施した平成 30 年度事業評価の結果に基づき、本事業のこれまでの推進状況については、参加した全ての機関から満足であるとの回答を得た。

・事業全般に対する意見

インターンシップについては、27 年度～29 年度実績参加者数が 200 人前後で推移しているので、数値目標を達成するため、募集期間の見直しなどを検討することや、学内外の合同説明会を更に充実させること、「わかやま未来創造人」認定をさらに普及させるため、パンフレットを持って県内主要企業に説明を行った方がよいという意見があった。

【2】学生自主演習合同研修

■平成30年度 COC+合同FD研修会（学生自主演習合同研修）

日 時：9月26日(水) 14:50~17:00

場 所：和歌山大学東1号館（基礎教育棟）G209講義室

テーマ：「実践型インターンシップ～クォーター制を活用した長期学外学修の充実に向けて～」

目的：クォーター制を活用した長期学外学修の充実も視野に入れ、和歌山大学わかやま未来学副専攻の科目「地域協働自主演習 adv.」等、実践型インターンシップとして行う地域連携教育活動実施に役立てる。特に受入側、学生、教員がそれぞれ無理なく効用を得られるようにする方法について考える。

概 要：実践型インターンシップのコーディネート機関による講演・ワーク、意見交換

講 師：NPO 法人 ETIC 伊藤淳司氏、瀬沼 希望氏 / NPO 法人 JAE 坂野充氏

参加者：18名（参加校教員ほか 7名、本学 11名）

【案内要項及び実施風景】

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」

平成30年度COC+合同FD研修会

（学生自主演習 合同研修会）

■位置づけ

- ・創専攻プログラムを実施するために必要なアクティブラーニング、PBL、インターンシップ等に必要と考え方・ノウハウを蓄積し、プログラム作り・改善に活かす。
- ・公開FD開催とすることで、様々な教職員がFD員を確保し、地域社会教育に取り組むことを促進する。

■実施内容

日時：平成30年9月26日(水) 14:50~17:00

場所：和歌山大学 東1号館（基礎教育棟）G209教室

テーマ：「実践型インターンシップ～クォーター制を活用した長期学外学修の充実に向けて～」

目的：クォーター制を活用した長期学外学修の充実も視野に入れ、和歌山大学わかやま未来学副専攻の科目「地域協働自主演習 adv.」等、実践型インターンシップとして行う地域連携教育活動実施に役立てる。特に受入側、学生、教員がそれぞれ無理なく効用を得られるようにする方法について考える。

概要：実践型インターンシップのコーディネート機関による講演・ワーク、意見交換

講師：NPO 法人 ETIC 伊藤淳司氏、瀬沼希望氏 / NPO 法人 JAE 坂野充氏

※

時間	内容
14:50~	問題意識・関心事項の共有ワーク
15:00~	講演・ワーク 「実践型インターンシップのプログラム開発と運営」
16:30~	意見交換
17:00	終了

●お申し込み（申込期限 9月20日(木)）

・Eメールにて「所属」「氏名（ふりがな）」をご記入の上、下記宛先までお申し込みください。

E-mail: cocplus@center.wakayama-u.ac.jp

●お問い合わせ

和歌山大学 COC+推進室

tel: 073-852-7147



4.わかやま未来学副専攻に関するアンケート

【1】めざす人材像

■教育目的

“わかやま未来学副専攻”では、「和歌山県まち・ひと・しごとにおける地方創生総合戦略」が掲げる基本目標に対応した4つの教育テーマに沿って自主的・実践的な教育を展開することにより、本県の地域社会が抱える多様かつ複合的な問題の解決に主体的に取り組み、わかやまの未来を切り拓く意欲を持った人材を育成します。地場産業、農林水産業、観光等のサービス業をはじめ教育、福祉、医療等、地域社会で幅広く活躍する活躍できる人材を育てます。

■副専攻が育成する人物像

わかやまに愛着を持ち、わかやまの未来を切り拓く意欲と能力を持った人材

■キーワード

コミュニケーション力、知力、体力、精神力、行動力

主体性、実行力、課題発見（解決）力、想像力、発信力

■習得すべき能力（わかやま未来学副専攻で育成する知識・能力）

地域が抱える課題を発見し、分析し、地域と協力しながら活動し、その経過を発信し、課題を解決できる能力

知識・マインド面
1. 知識とマインド
和歌山県の地域社会が抱える多様かつ複合的な問題を知り、その解決に向けて主体的に活動するマインドを持ち、実際に行動できる
能力・スキル面
2. プロジェクト・チーム運営スキル
地域社会を俯瞰し主体的に考え、判断すると同時に、個別の力を全体の力に転換していくプロジェクト運営・チーム運営ができる
3. 企画立案・マーケティングスキル
地域社会や内外の情勢に関わる情報を収集分析し、基礎的なマーケティングのスキルを活用して、イベントや事業の企画立案を行う事ができる
4. 合意形成・ファシリテーションスキル
様々な主体のニーズや考えを把握し、それぞれがより納得度の高い結論にいたる合意形成にいたるよう適切なファシリテーションを行うことで、ネットワークをさらに強化することができる
5. 情報発信・プレゼンテーションスキル
様々な情報を的確なターゲットに向けて、地域の魅力も含めて魅力的な形でわかりやすく発信することおよび、事業やイベントなどの趣旨を関係者に効果的に表現しプレゼンテーションできる

【2】わかやま未来学副専攻ルーブリック

■ルーブリック指標

カテゴリー	達成目標		小項目	5	4	3	2	1
知識	和歌山に関する知識を持ち、社会動向や学問的知識と関連付けて、現状把握・課題分析をすることができる	1	[域内知識] 和歌山に関する知識がある	県全体の情報と、広い地域(市町村)・分野の知識がある	県全体の <u>大まかな</u> 情報と、複数の地域(市町村)・分野の知識がある	県全体の <u>大まかな</u> 情報と、特定の地域(市町村)・分野の知識がある	和歌山のことを <u>大まかに</u> 知っている	和歌山のことをほとんど <u>知らない</u>
		2	[域外知識] (和歌山の課題解決に必要な)他地域の社会動向や学問的知識と関連付けて分析ができる	地域の課題について、社会動向や学問的知識と関連付けて <u>構造的な分析ができる</u>	社会動向や学問的知識と関連付けた <u>分析を試みる</u> ことができる	特定の他地域・分野と関連付けた <u>分析</u> ができる	特定の他地域・分野について <u>大まかな</u> 知識がある	社会動向や学問的知識をほとんど <u>知らない</u>
マインド	地域・社会(環境や他者)に対して当事者意識を持ち主体的に貢献する姿勢と、チャレンジ精神(向上心)がある	3	[当事者意識] 地域・社会などの環境や他者に対する当事者意識(責任感)・利他心(向社会性)がある	地域・社会全体をより良くしていこうという <u>高い公共心(市民性)</u> がある	所属する組織・場に対する <u>高い当事者意識</u> がある	所属する組織・場 <u>に貢献</u> する意識がある	身近な他者に対する <u>思いやり</u> がある	環境や他者に対し <u>関心がない</u>
		4	[チャレンジ精神] 障害があっても諦めないチャレンジ精神(向上心)がある	障害・リスク・反対があっても諦めずにチャレンジしようとする	小さな障害等があってもチャレンジしようとする	中長期的な目標を決めてチャレンジしようとする	日常生活において <u>小さな</u> チャレンジしようとする	何事もチャレンジしようと <u>しない</u>
スキル	企画立案・遂行力	5	[企画力] 企画立案・マーケティングスキルがある	フレームワーク等を適切に選択・活用し、十分に論理的な企画立案ができる	フレームワーク等を適切に選択・活用し、概ね論理的な企画立案ができる	与えられたフレームワークを用い <u>論理的</u> な企画立案ができる	与えられたフレームワークを用い <u>簡単な</u> 企画立案ができる	論理的思考の考え方や企画・マーケティングのフレームワークを <u>知らない</u>
		6	[実行力] プロジェクトマネジメントスキルがある	様々な知識・経験を応用し、計画から実行まで <u>十分に</u> プロジェクトマネジメントすることができる	<u>自立的に概ね</u> 一通りのプロジェクトマネジメントができる	<u>助けを借りながら</u> プロジェクトマネジメントができる	日常的な <u>小さな</u> プロジェクトのマネジメントができる	プロジェクトマネジメントの考え方を <u>知らない</u>
	コミュニケーション力 (相互作用・人間関係)	7	[聴く力] ファシリテーションスキル(引き出す・把握する力)がある	他者の <u>潜在的な感情や意見</u> ・ニーズも見・取り、 <u>整理</u> することができる	他者の意見を引き出し、 <u>整理</u> することができる	他者の意見を引き出し、 <u>理解</u> できる	他者の意見を <u>引き出す</u> ことができる	積極的に他者の意見を <u>引き出すことができない</u>
		8	[伝える力] プレゼンテーションスキル(表現力)がある 口頭・文章・デザイン等	状況に応じて適切な表現手段を用い、相手が理解できる <u>効果的な</u> 表現ができる	特定の手段において、相手が理解できる効果的な表現ができる	相手の立場を考慮した表現を意識することができる	助けを借りながら考えを表現することができる	積極的に考えを伝えることが <u>できない</u>

【3】授業アンケートの分析・評価

わかやま学群受講生に対するアンケート（前期）

和歌山大学の学生が選択必修で履修する教養科目である「わかやま」学群の授業を履修した学生を対象に、アンケート調査を実施した。アンケートは初年次学生からの回答を出来る限り広く収集するために教養かつ選択必修科目である「わかやま」学群の受講生を対象とした。アンケートの実施は、当該科目の担当教員が授業を利用して学生に依頼し、記入後その場で回収したが、回答自体は学生の任意とした。科目を重複して受講した学生は初回時のみの回答とした。アンケートの実施時期は2018年4月16日～27日であった。

アンケート内容は主に5つから構成されている。性別や学部・学年の(1)属性情報、(2)入学前後の居住地、(3)地域活動への参加の程度、授業を受けた上での(4)和歌山県への興味・関心、および(5)入学時の希望就職地を調査した。アンケートの回答は学生の任意とし、無記名で実施した。本報告書では、特に初年次学生の現状把握および、「わかやま」学群の教育活動の効果に着目して、(1)属性情報、(4)和歌山県への興味・関心について分析を行う。

はじめに、アンケートの回答者の属性について記述する。事前アンケート回答者数は756名、延べ履修者(982名)に対する回答率は76.5%であった。事後アンケートでは、回答者は690名であり、回答率は70.2%であった。このうち初年次学生の回答者数は事前574名、事後520名であった。ただし、学部ごとの回答者数にはばらつきがあり、経済学部とシステム工学部が多く、教育学部と観光学部が相対的に少なかった(表1)。なお、本報告で以降用いる初年次学生のデータは、事前では初年次回答者の574名を、事後では520名を対象とした。

表1 学部・学年別の回答者数（事前）

学部	学年					総計
	1年生	2年生	3年生	4年生	その他	
教育学部	46	13	12	9	1	81
経済学部	270	18	14	3	1	306
システム工学部	216	45	30	14	2	307
観光学部	42	7	10	1	0	60
その他	0	0	0	1	1	2
総計	574	83	66	28	5	756

表2 学部・学年別の回答者数（事後）

学年	学年					総計
	1年生	2年生	3年生	4年生	その他	
教育学部	44	12	10	4	1	71
経済学部	233	17	16	3	1	270
システム工学部	201	40	32	9	2	284
観光学部	40	11	10	1	1	63
その他	2	0	0	0	0	2
総計	520	80	68	17	5	690

次に、初年次学生へのわかやま学群の教育効果を評価するために、和歌山県への興味・関心の程度について事前と事後で分析する（表3-1、2）。関心がある、大いに関心があるを選んだ割合を、事前と事後で比べると、事前では 34.5%から事後では 44.1%と 10 ポイントあまり上昇しわかやま学群の授業の効果が現れていると言えるだろう。

表3-1 授業前の和歌山県への興味・関心の程度（事前）

和歌山県への興味関心(事前)						
学部	大いに関心がある	関心がある	どちらともいえない	あまり関心がない	全く関心がない	総計
教育学部	2 4.3%	21 45.7%	16 34.8%	2 4.3%	5 10.9%	46 100.0%
経済学部	14 5.2%	71 26.3%	111 41.1%	42 15.6%	32 11.9%	270 100.0%
システム工学部	4 1.9%	56 25.9%	90 41.7%	43 19.9%	23 10.6%	216 100.0%
観光学部	5 11.9%	25 59.5%	11 26.2%	1 2.4%	0 0.0%	42 100.0%
総計	25 4.4%	173 30.1%	228 39.7%	88 15.3%	60 10.5%	574 100.0%

表3-2 授業後の和歌山県への興味・関心の程度（事後）

和歌山県への興味関心(事後)							
学部	大いに関心がある	関心がある	どちらともいえない	あまり関心がない	全く関心がない	無回答	総計
教育学部	2 4.5%	13 29.5%	18 40.9%	2 4.5%	9 20.5%	0 0.0%	44 100.0%
経済学部	23 9.9%	77 33.0%	93 39.9%	19 8.2%	20 8.6%	1 0.4%	233 100.0%
システム工学部	10 5.0%	75 37.3%	62 30.8%	30 14.9%	23 11.4%	1 0.5%	201 100.0%
観光学部	8 20.0%	21 52.5%	7 17.5%	4 10.0%	0 0.0%	0 0.0%	40 100.0%
その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%
総計	43 8.3%	186 35.8%	180 34.6%	57 11.0%	52 10.0%	2 0.4%	520 100.0%

また、わかやま学群の事後において後期の「地域協働セミナー」を受講するかを訪ねたところ 22 名と非常に少なく、わからないが多数を占めた。しかし、実際では後期の地域協働セミナーの開講時の登録数は 275 名であった。前期中では後期の時間割の関係もあり、この授業では確信的に受講したいという動機は生まれなかったと言える。

表4 地域協働セミナー受講希望（事後）

「地域協働セミナー」の受講意向					
学部	履修を予定している	履修を予定していない	わからない	無回答	総計
教育学部	0 0.0%	33 75.0%	11 25.0%	0 0.0%	44 100.0%
経済学部	9 3.9%	115 49.4%	107 45.9%	2 0.9%	233 100.0%
システム工学部	4 2.0%	108 53.7%	86 42.8%	3 1.5%	201 100.0%
観光学部	9 22.5%	23 57.5%	8 20.0%	0 0.0%	40 100.0%
その他	0 0.0%	1 50.0%	1 50.0%	0 0.0%	2 100.0%
総計	22 4.2%	280 53.8%	213 41.0%	5 1.0%	520 100.0%

わかやま学群受講生に対するアンケート（後期）

前項と同様の意図をもって、「わかやま」学群の受講生を対象としたアンケートを行った。具体的には後期開講科目である2科目「わかやま未来学」、「和歌山トップ企業経営論」の授業を通じて配布・回収を行った。アンケートの実施は、当該科目の担当教員が授業を利用して学生に依頼し、記入後その場で回収したが、回答自体は学生の任意とした。「わかやま未来学」、「和歌山トップ企業経営論」の双方を重複して受講した学生は初回時のみの回答とした。アンケートの実施日時は2018年10月11日及び2019年1月24日であった。

アンケート内容は主に6つから構成されている。性別や学部・学年の（1）属性情報、（2）入学前後の居住地、（3）地域活動への参加の程度、授業を受けた上での（4）和歌山県への興味・関心、（5）入学時と現在の希望就職地、および（6）副専攻の登録希望について調査した。この内容は前期実施の質問項目に沿って構成し、今回は（5）と（6）の項目を修正・追加している。アンケートの回答は学生の任意とし、無記名で実施した。本報告書では、前項と同様に、特に初年次学生の現状把握および、「わかやま」学群の教育活動の効果に着目して、（1）属性情報、（4）和歌山県への興味・関心、（6）副専攻の登録希望について分析を行う。なお、アンケート実施時期が前項の前期実施分と本項の後期実施分では約7ヶ月離れているため、この両者のデータは通算せず、別個の調査として報告する。

はじめに、アンケートの回答者の属性について記述する。アンケート回答者数は事前が290名、事後が58名であった。このうち初年次学生の回答者数は事前が222名、事後が47名であった（表5-1、2）。なお、本報告で以降用いる初年次学生のデータは上記の222名及び47名を対象とした。

表5-1 学部・学年別の回答者数（事前）

学年							
学部	1年	2年	3年	4年	その他	総計	
教育学部		44	7	3	1	0	55
経済学部		69	24	4	1	0	98
システム工学部		79	16	4	1	0	100
観光学部		30	3	2	0	0	35
その他		0	0	0	0	2	2
総計		222	50	13	3	2	290

表5-2 学部・学年別の回答者数（事後）

学部	学年					総計
	1年生	2年生	3年生	4年生		
教育学部		2	4	0	0	6
経済学部		21	4	0	0	25
システム工学部		20	1	0	1	22
観光学部		4	0	1	0	5
総計		47	9	1	1	58

次に、初年次学生へのわかやま学群の教育効果を評価するために、和歌山県への興味・関心の程度について分析する（表 6,7）。全学部をみると、「大いに深まった」と「深まった」を合わせると、事前の 36.9%から 44.6%への上昇している。これらの前期後期のわかやま学群を初めとした、和歌山大学が行う初年次学生への地域指向の教育活動は成果を上げていると考えられる。

表 6 和歌山県への興味・関心の程度

学部	和歌山県への興味関心(事前)						総計
	大いに関心がある	関心がある	どちらともいえない	あまり関心がない	全く関心がない	無回答	
教育学部	6 13.6%	7 15.9%	16 36.4%	10 22.7%	5 11.4%	0 0.0%	44 100.0%
経済学部	6 8.7%	20 29.0%	23 33.3%	10 14.5%	10 14.5%	0 0.0%	69 100.0%
システム工学部	3 3.8%	19 24.1%	26 32.9%	19 24.1%	11 13.9%	1 1.3%	79 100.0%
観光学部	9 30.0%	12 40.0%	7 23.3%	2 6.7%	0 0.0%	0 0.0%	30 100.0%
総計	24 10.8%	58 26.1%	72 32.4%	41 18.5%	26 11.7%	1 0.5%	222 100.0%

表 7 和歌山県への興味・関心の程度

学部	和歌山県への興味関心(事後)						総計
	大いに関心がある	関心がある	どちらともいえない	あまり関心がない	全く関心がない	無回答	
教育学部	0 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	2 100.0%
経済学部	4 19.0%	11 52.4%	4 19.0%	1 4.8%	1 4.8%	0 0.0%	21 100.0%
システム工学部	0 0.0%	2 10.0%	6 30.0%	5 25.0%	6 30.0%	1 5.0%	20 100.0%
観光学部	1 25.0%	2 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 25.0%	0 0.0%	4 100.0%
総計	5 10.6%	16 34.0%	10 21.3%	6 12.8%	9 19.1%	1 2.1%	47 100.0%

最後に、副専攻の登録希望に注目した（表 5）。本アンケートでは、副専攻に履修登録を予定している学生は 3 名であった。前項や本アンケートで分析したように、わかやま未来学やわかやま学群などの初年次学生に対する地域指向の教育活動により、和歌山県への興味・関心の程度はある程度高まっており、教育成果が認められる。しかし、全学的な地域指向的教育活動だけでは、初年次学生にとって、わかやま未来学副専攻の履修動機に全くつながっていないことが判明した。

このことを踏まえ、学生の副専攻登録を増加させるためには、一般的な地域指向の教育活動を行うことに加えて、副専攻で行われる内容をより具体的に扱う授業を組み合わせることが必要であり、副専攻の導入科目（地域協働セミナー等）の重要性が浮き彫りになる結果となった。

表 8 わかやま未来学副専攻の受講登録の意向（わかやま学群後期）

学部	わかやま未来学副専攻の受講登録の意向				総計
	履修を予定している	履修を予定していない	わからない	無回答	
教育学部	0 0.0%	2 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%
経済学部	2 9.5%	9 42.9%	9 42.9%	1 4.8%	21 100.0%
システム工学部	0 0.0%	13 61.9%	6 28.6%	1 4.8%	20 95.2%
観光学部	1 25.0%	2 50.0%	1 25.0%	0 0.0%	4 100.0%
総計	3 6.4%	26 55.3%	16 34.0%	2 4.3%	47 100.0%

地域協働セミナー受講生に対するアンケート（事前及び事後）

わかやま未来学副専攻科目の初年次科目である地域協働セミナーの受講生に対して、アンケートを行うことで、教育活動の効果について分析した。アンケートは地域協働セミナーの「2 回目」及び「最終回」の講義の時間を利用して配布・回収した。アンケートの実施は、当該科目の担当教員が授業を利用して学生に依頼し、記入後その場で回収した。なお、回答自体は学生の任意とした。また、本アンケートは今後の追跡調査を行うため学籍番号を記述する形式とした。アンケートの実施時期は 2018 年 10 月 10 日および 2019 年 1 月 23 日であった。アンケート内容は主に 6 つから構成されている。性別や学部・学年の（1）属性情報、（2）入学前後の居住地、（3）地域活動への参加の程度、（4）アンケート実施時の和歌山県への興味・関心、（5）アンケート実施時の希望就職地、（6）副専攻の履修登録予定を調査した。本報告書では、初年次学生の地域協働セミナーにおける教育活動の効果に着目して、4）アンケート実施時の和歌山県への興味・関心、（6）副専攻の履修登録予定について分析を行う。

はじめに、事前アンケートの回答者の属性について記述する。アンケート回答者数は 220 名、履修者（275 名）に対する回答率は 80.0%であった。このうち初年次学生の回答者数は 193 名であった。アンケート回答者はシステム工学部が多く、教育学部が少なかった（表 9）。

事前アンケートではうち初年次学生 193 名に着目して分析対象とした。また後期では 223 名からアンケートを回収した。なお、事後アンケートでは学年を問うていないため、初年次学生とそうでは無い学生が混ざってしまっているが、事前アンケートの結果より 1 年次学生以外の割合は 1 割以下であるため、その影響は無視することとし、同様に比較することで教育効果をみることにした。

表 9 学部・学年別の回答者数（地域協働セミナー講義 2 回目）

学部	学年			無回答	総計
	1年	2年	3年		
経済学部	46	14	6	0	66
教育学部	6	0	0	0	6
システム工学部	78	2	3	1	84
観光学部	63	1	0	0	64
総計	193	17	9	1	220

次に地域協働セミナー等、地域指向的教育活動の初年次学生への教育効果を評価するために、和歌山県への興味・関心の程度について入学時とアンケート実施時の比較を行った。全学部を見ると、授業の中間ふりかえりであるアンケート実施時の興味・関心の程度は、入学時の関心の程度に比べて、大いに興味がある・興味があるという積極的な回答が増加するかわりに、あまり・全く関心が無いという消極的な回答が減少している。（表 7、表 8）。このことから、入学時と比べて地域協働セミナーや「わかやま」学群ほかの和歌山大学が初年次学生に対して行う地域指向的な教育活動によって、学生の和歌山県に対する興味関心の程度が高まっている事が示唆された。

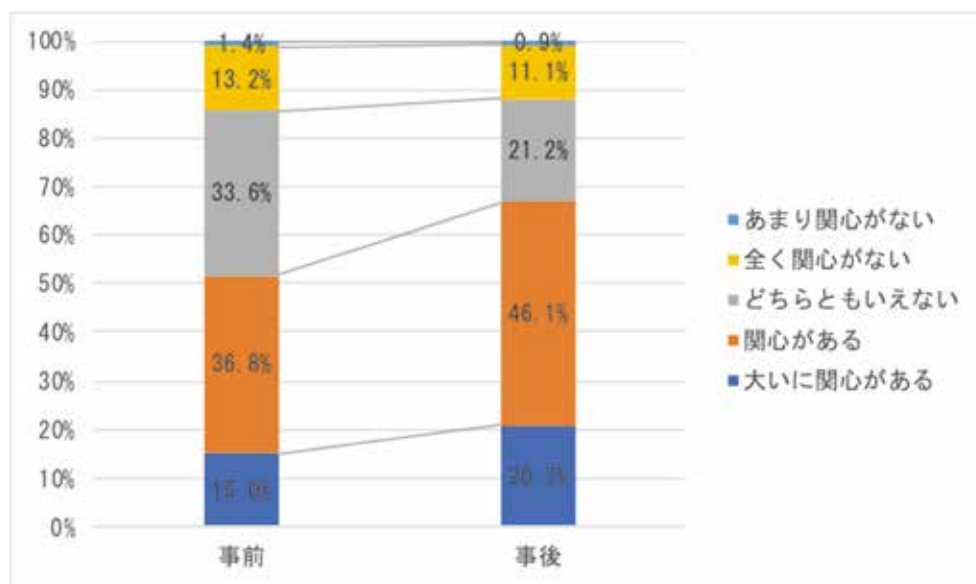


図 1 アンケート実施時（事前・事後）における和歌山県への興味・関心の変化

表 10 講義満足度（事後）

大いに満足	38	17.0%
満足	141	63.2%
どちらともいえない	35	15.7%
あまり満足ではない	4	1.8%
全く満足ではない	1	0.4%
無回答	4	1.8%
総計	223	100.0%

地域協働セミナーの講義満足度については 8 割近くの学生が満足、または大いに満足したと回答し、この授業の授業構成については概ね良かったものと考えられる。

最後に、事後アンケートでのわかやま未来学副専攻の履修登録を行う意向について着目した。アンケート実施時では、副専攻に履修登録を予定している学生は 44 名であった。前述したように、わかやま未来学や「わかやま」学群などの初年次学生に対する地域指向の教育活動により、和歌山県への興味・関心の程度はある程度高まっており教育成果が認められる。しかし、それが功奏して学生の副専攻に登録する動機が十分に高まっているとは言えない結果となった（表 11）。

今後、副専攻の実際の履修登録者を増やすには、わからないと回答した約半数の 98 名をどのように履修登録へとつなげるかを考え、広報活動などを強化することに加えて、次年度以降の講義内容を充実させ、わかやま未来学副専攻の魅力を学生にさらに伝えることが必要である。

表 11 わかやま未来学副専攻の履修登録の意向

履修を予定している	44	19.7%
履修を予定していない	77	34.5%
わからない	98	43.9%
無回答	4	1.8%
総計	223	100.0%

地域協働自主演習Ⅰ受講生に対するアンケート（事前・事後）

地域協働自主演習Ⅰ受講生に対するアンケートは、2 回目の授業および授業最終回にて事前・事後として実施した。履修登録は 73 名であったところ、事前では 69 名（94.5%）、事後では 62 名（84.9%）の回答を得た。質問内容は（1）属性情報（2）通学地（3）和歌山県への関心（4）就職地希望（5）副専攻受講希望の項目であった。事後アンケートでは、

(6) 講義満足度および理解度を項目として聞いている。本報告では、教育効果を図るため、和歌山県への関心及び講義満足度、講義理解度について着目し、事前・事後のデータをもちいて論ずる。

表 12 和歌山県への関心

	入学時	事前	事後
大いに関心があった	8.7%	17.4%	11.3%
関心があった	29.0%	14.5%	75.8%
どちらともいえない	24.6%	63.8%	12.9%
あまり関心がなかった	26.1%	4.3%	0.0%
全く関心がなかった	11.6%	0.0%	0.0%
総計	100.0%	100.0%	100.0%

表 12 にあるように、入学時から地域協働自主演習Ⅰ授業前、授業事後にかけて、和歌山県への関心が高まっている。地域協働自主演習Ⅰの授業内容は和歌山県への関心や和歌山県の課題を考える授業構成となっているため、教育効果が上がっていると考えられる。「どちらとも言えない」が減少し、8割強の学生が和歌山県に興味があると回答していることは、教育が適切であったことがいえる。

次に、事後アンケートで測定した、講義満足度であるが、表 13 にあるように高い評価となった。

表 13 講義満足度

大いに満足	7	11.3%
満足	38	61.3%
どちらともいえない	14	22.6%
あまり満足ではない	3	4.8%
総計	62	100.0%

ほぼ全員が満足・とても満足と回答していることは特筆すべき事である。

また理解度についても、表 14 にあるように高い評価となった。

表 14 講義理解度

大いに理解できた	5	8.1%
理解できた	53	85.5%
どちらともいえない	4	6.5%
あまり理解できなかった	0	0.0%
まったく理解できなかった	0	0.0%
総計	62	100.0%

各授業においてわかりやすい授業を展開したことがこの結果から判明した。

地域協働自主演習 II 受講生に対するアンケート（事後）

地域協働自主演習 II 受講生へのアンケートは授業最終回（2018 年 1 月 24 日）に行った。受講者は 52 名であり、うち 50 名より回答を得た。アンケート内容は（1）属性情報、（2）地域活動への参加の程度、授業を受けた上での（3）和歌山県への興味・関心、（4）希望就職地（5）講義満足度（6）講義理解度、（7）副専攻の修了希望について聞いた。ここでは教育効果について論ずるため（3）和歌山県への関心、（5）講義満足度（6）講義理解度、（7）副専攻の修了希望について着目して論ずる。

まず、和歌山県への関心は、地域協働自主演習 I の結果をほぼ維持する結果となった。

表 15 和歌山県への関心

大いに関心がある	15	30.0%
関心がある	28	56.0%
どちらともいえない	4	8.0%
あまり関心がない	2	4.0%
全く関心がない	0	0.0%
BLANK	1	2.0%
総計	50	100.0%

このことから地域協働自主演習 II 受講生は、高い和歌山への興味を失うことなく授業に臨み学修を行ったことが言える。また、和歌山県への関心がこの講義を通じて深まったかという問いに対しては、ほぼ全員が関心が高まったと回答した。実際にフィールドにでること、興味関心が高まることが判明した。

表 16 授業を受けて和歌山県への関心が深まったか

大いに関心が深まった	11	22.0%
関心が深まった	37	74.0%
どちらともいえない	1	2.0%
あまり関心が深まらなかった	1	2.0%
全く関心が深まらなかった	0	0.0%
総計	50	100.0%

次に、地域協働自主演習 II の講義満足度については、表 17 にあるように 8 割近い学生が満足したと回答した。ただし、あまり満足では無いという回答があり、この学生には期待に応えられなかったと言えるであろう。和歌山県への関心が深まっているにもかかわらず不満足であるということは、授業の内容が学生の期待する内容とミスマッチしていたと捕らえるべきであろう。数としては少数であるが、注目すべき回答である。

表 17 講義満足度

大いに満足	12	24.0%
満足	28	56.0%
どちらともいえない	9	18.0%
あまり満足ではない	1	2.0%
全く満足ではない	0	0.0%
総計	50	100.0%

講義の理解度では図 18 にあるようにほぼ全員が理解出来たと回答している。講義満足度と合わせて考えるとこれは授業の質としてはよかったものの、ごく一部の学生には内容のミスマッチがあったことを裏付ける内容である。

表 18 講義理解度

大いに理解できた	8	16.0%
概ね理解できた	39	78.0%
どちらともいえない	3	6.0%
あまり理解できなかった	0	0.0%
全く理解できなかった	0	0.0%
総計	50	100.0%

最後に、副専攻プログラムを最後まで授業するかということについては表 19 をみると、60%がこのまま地域協働自主演習 Adv.を履修し修了したいと考えているが、残りの 16 名がわからないとなっており、まだ修了について迷っている様子が見られる。これは学生が多忙な中で長期インターンシップに割く時間がないということもあり、来期の時間割やその他の学生の活動の時間の兼ね合いによって決まる物と推察される。

表 19 副専攻プログラム修了の意向

修了を希望している	30	60.0%
修了を希望していない	4	8.0%
わからない	16	32.0%
総計	50	100.0%

ルーブリック自己評価について

わかやま未来学副専攻では学生の学修自己評価の 1 つとしてルーブリックを採用している。これは、わかやま未来学副専攻の目指す人材像から書き起こしたルーブリックであり、5 段階評価で到達度を各自が記入するものである。地域協働自主演習 I 初回及び最終回に配付し、自己採点することで学びの到達度をみずから考える機会として使用している。

地域協働自主演習Ⅰでは全員の平均を図2に表した。この図にあるように受講前よりも受講後に自己評価の数値が上がっており自己効力感が高まっている結果となった。

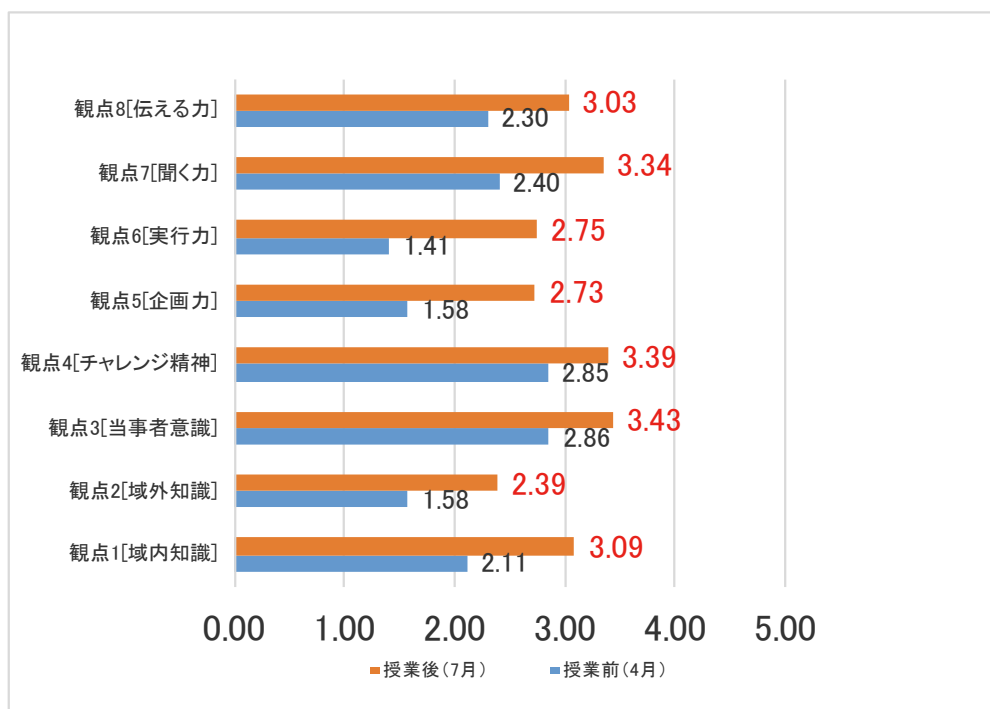


図2 地域協働自主演習Ⅰ自己評価

5. 紀の国大学参加校の取り組み

【1】参加校の教育プログラム

■和歌山大学

わかやま未来学副専攻



キーワードは
・協働教育
・実践型インターンシップ
・地域志向キャリア教育
・創業支援

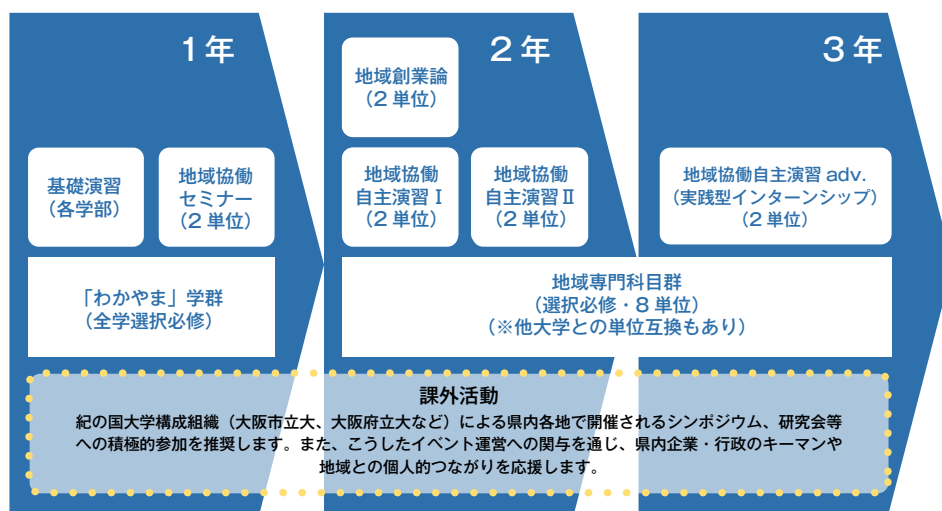
「わかやま未来学副専攻」とは、大学、地方公共団体、県内企業、NPOなどとの**協働教育**を展開することを基本とし、地域課題に即した実践的な「教育科目」および「**実践型インターンシップ**」からなる教育プログラムです。

この副専攻に託した願いは、和歌山県の深刻な地域課題に向き合いつつ、秀逸な自然環境と文化資源を生かした取り組みを学生たちが自主的に地域の人たちと協働しながら行っていくことです。

そのための基礎知識を1年次、2年次前期に座学およびグループワークを主体とした講義で学び、2年次後期、3年次には、地域に出て、実践的な体験を積みながら地域課題の解決に取り組んでいきます。

また、和歌山県内に定着・定職を図るべく**地域志向キャリア教育**やビジネスコンテストなどへの参加・**創業支援**も行っています。

わかやま未来学副専攻のカリキュラム



プロジェクト一覧(2016～2017年度実施地域)

①6次産業化実践(田辺市、紀の川市)



農林水産業の6次産業化を実践するプロジェクトで、田辺市、紀の川市等の農業法人、農業関連企業で実習を行います。農産物や地域資源を活用した商品・サービスの開発ができる人材をめざします。

(p9-10)

②家庭用品イノベーション(海南市)



海南市の家庭用品産業において生産技術・製品開発を企画・立案を行うプロジェクトです。地場産業の振興をプロセス・プロダクト両面からイノベーションを促進できる人材をめざします。

(p11-12)

③地域づくり戦略構想(田辺市、紀の川市、紀美野町、上富田町)



和歌山県が実施する地域づくりワークショップを通じて地域の課題や資源を評価し、具体的な実行計画の提案をするプロジェクトです。地域の現状の把握→課題の発見→地域資源を活用した課題解決手法を実践できる人材をめざします。

(p13-14)

④自立・地域共生推進～地方で新しい事業づくり～(新宮市、白浜町、古座川町)



南紀熊野地域を中心に「新しい仕事づくり」を目標に地域実践者・観光事業者などへの「弟子入り」を行うプロジェクトです。課題を多角的視点でとらえ直し、豊かな自然資源を活用できる自立的な能力を持った人材をめざします。

(p15-16)

⑤地域資源を生かした生業づくりとまちづくり(九度山町)



九度山町をフィールドに自然および歴史環境と親しみながら、地域資源を生かしたまちづくりを実践するプロジェクトです。地域の特性を生かした生業づくりやまちづくりについて考え実践できる人材をめざします。

(p17-18)

⑥地方都市のまちなか再生(和歌山市)



和歌山市をフィールドに、中心市街地などの特定エリアの再生に取り組むプロジェクトです。まちなかを取り巻く背景・課題と潜在的資源を客観的に抽出し、多様な主体と連携・協働し、将来ビジョンを提示、具体的アクションを企画・実践できる人材をめざします。

(p19-20)

⑦宿泊業を中心とした着地型観光ビジネス(かつらぎ町)



古民家再生による民泊事業のサービス開発、プロモーション、地域観光連携等に取り組むプロジェクトです。

宿泊業の現場で未来を見据えた観光サービスを開発できる人材をめざします。

(p21-22)

■大阪市立大学

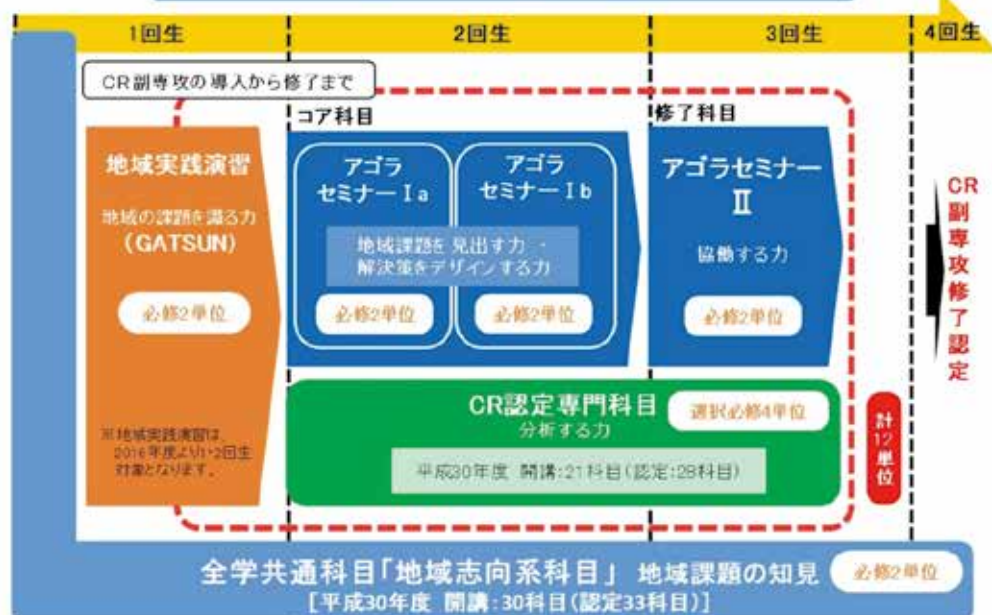
大阪市立大学

地域志向教育プログラム概要

- 地域における複合的な課題と向き合うため、より実践的な人材の育成を目指し地域志向教育の体系化を行っています。

- 大学で地域を知ための「地域志向系科目」を2015年度以降の全入学生を対象に必修化して、全学生を対象とすることで、地域を学ぶことのすそ野を広げます。
- さらに、CR(コミュニティ再生)副専攻制度を導入し、「地域実践演習」、「アゴラセミナー」の新設、CR認定専門科目の他学部への開放、実習インターシップの実習(課外)を行います。
CR副専攻を通して、地域課題を「知る」「分析する」「見出す」「伝える」スキル、そして地域に出て「行動する」スキルを修得し、地域と「協働する力」の育成を目指します。

CR副専攻カリキュラム概要図

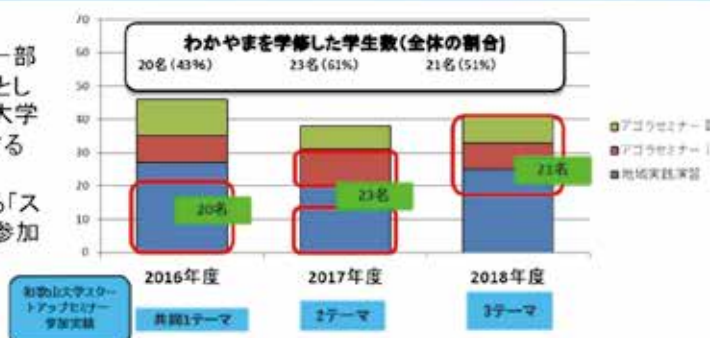


- 大阪の再生賦活と安全・安心の創生をめざす地域志向教育を実践



CR(コミュニティ再生)副専攻プログラムのCOC+への展開(活動事例)
(2018年度)

●CR副専攻プログラムの一部を“わかやま”をフィールドとしたCOC+へ展開し、紀の国大学にも開放し、学生の学修する機会を構築しています。
和歌山大学より提供される「スタートアップセミナー」にも参加しています。



地域実践演習

1 地域実践演習Ⅲ[地域福利]:「紀伊半島における地域再興の学修」
—都市・農村の諸相に接する—「すごい人に出会う、そして場所の力を体感する」

2018年度



1市6町がそれぞれバラエティに富んでいる御坊・日高川流域で「すごい人に出会う、そして場所の力を体感する」をテーマに、地方が持つ課題と、再興に向け取り組まれている状況を鑑み、地域の力に接し、それを具体的に学び取ることを目的としています。

アゴラセミナー

2 地域福利クール:「紀伊半島の地域再興の学修」
—熊野川町、新宮市街でスタディツアー—

2018年度



和歌山県の中山間地域で、地域が抱える課題と再興に向けた取り組み事例を学び、地域活性化の糸口に触れることを目的とした学修で、地元の協議会、NPO、市役所、企業、青年会などと協働で実施することにより、見るだけではわからない取り組み事例の本質を鑑み、課題を見出し、解決策をデザインすることを目的としています。

連携事業

3 わかやま未来学副専攻「プラスチック成形技術」開講:共同実習

2018年度



わかやま未来学副専攻の地域専門科目群「プラスチック成形技術」が大阪市立大学、和歌山大学、和歌山工業高等専門学校で化学の専門教員が参画し和歌山大学で開講されました。またこの授業の一環で、現場での実践的な体験を得ることを目的として、大阪市立大学のゼミ生と和歌山大学の学生とが共同で大阪産業技術研究所の現場を見学・実習しました。

4 命と生活のインフラ「まちづくり」:「御坊まち活性化ゼミナール」

2018年度



紀の国大学の教育テーマの一つである「命と生活のインフラ」である「まちづくり」を理解するため、御坊市と紀の国大学の3校(大阪市立大学、和歌山大学、和歌山工業高等専門学校)が共同で、「防災」、「観光」、「歴史」をテーマに、まちを活性化するためのアイデアを企画立案することを目的として、まち歩きとワークショップのゼミナールを実施しました。

1. 大阪府立大学の教育プログラム概要図

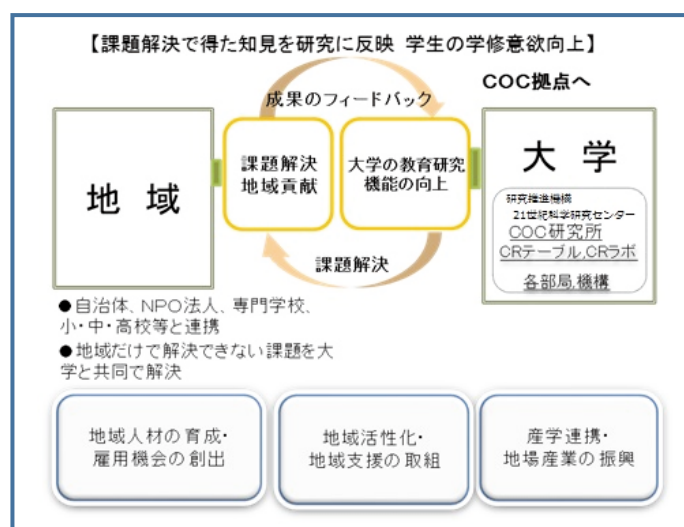
(1) 地域再生(CR)副専攻の目標

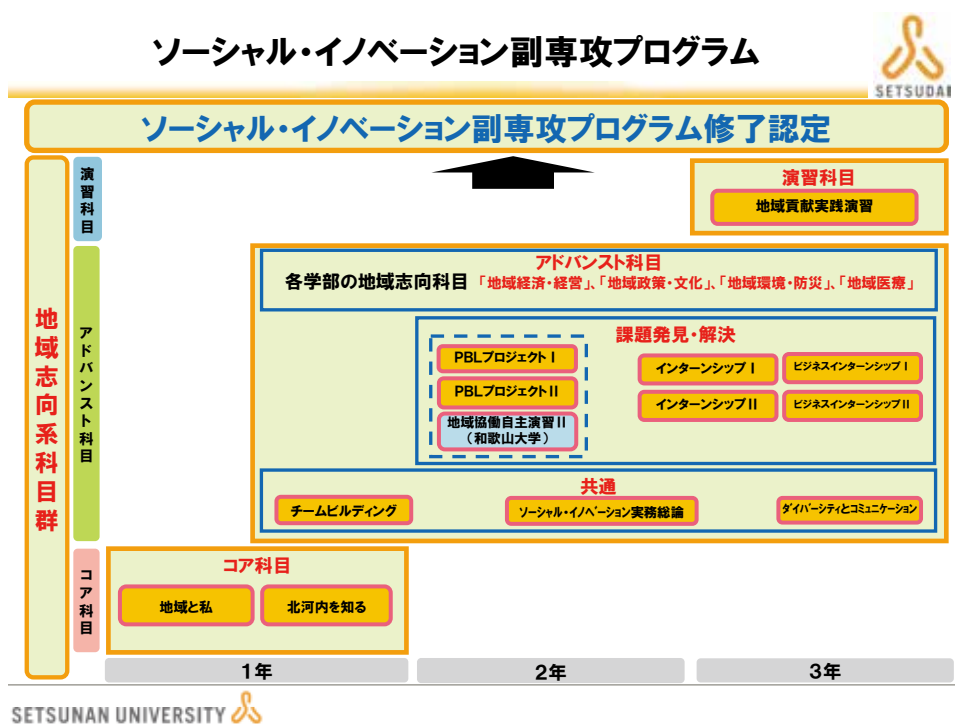
「地域再生(Community Regeneration: CR)副専攻」を学士課程に新設し、地域貢献に資する教育研究を行うことにより、地域志向の学生育成とともに、大学が地域の拠点としてその発展に寄与することを目指します。

(2) カリキュラムのイメージ



(3) 地域貢献と推進体制





■和歌山工業高等専門学校

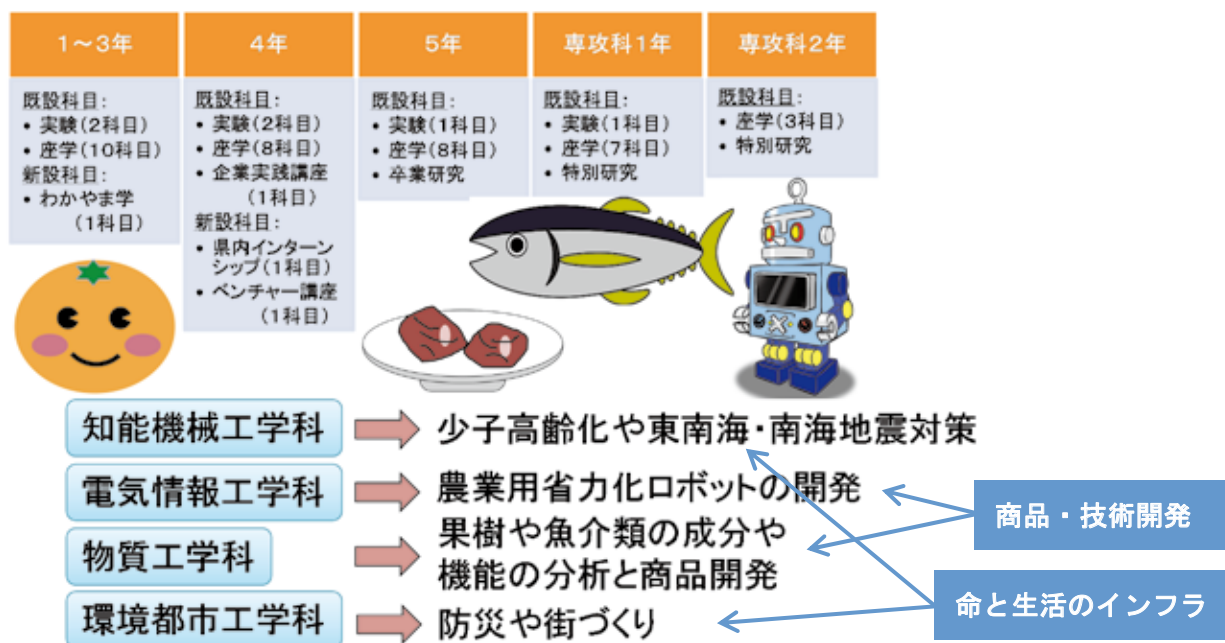
教育プログラム概要

低学年で和歌山の歴史や文化を体験し、地元への理解と興味を深めることを目的に自主演習型の地域学「わかやま学」を新設しました。高学年では既存の専門科目の中で地域色を深め、さらに卒業研究や特別研究での地元企業との共同研究を奨励することで、学生が地域の産業や技術者と実際に関わる機会を増やしています。また、各専門学科では、学生実験等で商品・技術開発や命と生活のインフラと言った和歌山県が抱える課題を意識した取り組みを行っています。



わかやまを知る若手エンジニアを育成し地域の未来を切り拓くー「地」の「知」の拠点としての和歌山高専ーをスローガンに取組んでいます。

地域指向科目一覧



① フィールドワーク（わかやま学）

2年生のわかやま学では、全学生が各専門に対応した県内企業そして那智大社、高野山そして熊野古道などの名所旧跡を見学します。

② 県内インターンシップ

4年生では、既設の学外実習（選択、1単位）に加え、県内の企業や自治体等で行う県内インターンシップ（選択、2単位）を併設しました。



③ 公開講座

従来の教員主導の講座ではなく、高専の学生が地域の子供たちと触れ合い、実験の面白さを伝える取組です。学生が公開講座で行う実験の計画から指導まで主体的に行います。

④ わかやま学公開成果報告会

2年生で実施しているわかやま学の活動の集大成であり、県内の工場や名所旧跡などを見学し、さらに事前・事後学習で得た成果も含め、まとめた成果をグループ発表します。



子育て・子育てサポーター養成講座

子育てに関する専門的な知識・技能を有し、育児相談に応じて、適切な情報を提供できる「子育て・子育てサポーター」を養成する。また、本養成講座は厚生労働省が参考として示すファミリー・サポートセンターの提供会員への講習と同等として和歌山県が認定する。

H28年度(初年度)認定：133名 H29年度(今年度)認定予定：168名

カリキュラム表

- ・保育のこころ
- ・心の発達とその問題
- ・身体の発達と病気
- ・小児看護の基礎知識
- ・安全・事故
- ・子どもの世話
- ・子どもの遊び
- ・子どもの栄養と食生活
- ・事業の円滑に運めるために
- ・子育てをめぐる現状と取り組み

実践的理解と
子育て当事者の声を聞く
ことを目的に、授業内で
「わかれ愛ルーム木のおうち」を見学

YES

和歌山県内の子育て・子育て支援の現状と課題について理解ができた (90.7%)
機会があれば子育て・子育て支援に関わってみたいと思った (88.2%)
授業内容は将来自分が子育てをする時に役立つと思った (97.5%)
授業を受けて、地元に残って地域に貢献したいと思った (74%)



和歌山県が、厚生労働省が示す
ファミリー・サポートと同等と認定
和歌山信愛女子短期大学学長が認定

■受講学生へのアンケート (H28年度 119名回答)

■「子育て・子育てサポーター」認定書(見本)



基礎教養科目群『紀の国わかやまと世界』

1年次・2年次を通して地域志向の7科目を開講し、
「紀の国わかやま」に関する知識と、郷土愛をもって
社会の発展のために積極的に関わっていける人材を育てます。



紀の国の 歴史と文化

紀の国の歴史と文化について、古代から現代までの歴史上重要な出来事や文化財を事例にあげ、中央の歴史や文化とどのように関連するのか学習する。そのため、史料に基づいて史実を検証し、紀の国の歴史と文化について幅広く理解を深める。

紀の国の 文学

和歌山県に関連する文学作品を鑑賞し、その作品の舞台となった地域環境を理解する。
授業ではさまざまな資料を使って説明する。学生は文学作品を理解し、鑑賞する力を身につけ、地域への親近性をつちかう。

紀の国の 自然

最初に世界的な視野で自然を理解し、日本、和歌山、自分の生活している地域の自然を理解させる。テーマを決めて地域の調査研究を行い、発表する。積極的に自然保護に取り組むことができ、和歌山の情報発信ができる能力を養う。

地域子育て・ 子育て支援論

和歌山県を中心とした地域の子育て・子育て支援について理解し、専門的知識を身につけて地域貢献ができる人材育成を目指す。厚生労働省が参考として示すファミリー・サポート・センターの提供会員への講習と同等の内容を満たす。

地域 社会学

個人と社会の関連を研究の対象とし、社会がいかに成り立つかを考察する。個人の誕生から関わる家族集団を出発点とし、様々な社会集団について学んでいく。特に地域社会に着目し、地域振興や防災、コミュニティのあり方などについて考察する。

地域 経済論

街の興隆と衰退の歴史、街づくりに対する行政の施策、他地域の街づくり先進事例を学んだ後、新たなまちづくり手法として近年注目されているリノベーションまちづくりについて学ぶ。街の一員として、自立した考えを持つことを目標とする。

紀の国の 食文化

和歌山の食文化は、温暖な気候と縦長の地形により、豊かな沢山の文化が生まれ育っている。川・山・海の文化がそれに拍車をかけ宗教風土も加わり、持ちきれんばかりの素晴らしい「食文化」が存在していることを理解する。



【2】平成 30 年度の取り組み

■和歌山大学

6 次産業化の実践による農林水産業活性化プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】かつらぎ町、海南市

【担当教員】木村亮介（クロスカル教育機構
教養・協働教育部門講師）

【協 働 先】中野 BC 株式会社
古都里

1. 事業概要・目的

6 次産業化に取り組んでいるアグリビジネス事業者との協働を通して商品・サービス・イベントなどについて検討し、地域と生産者と消費者の三方の利となる提案を行うものである。

受け入れ先で検討されている商品・サービス・イベント開発のサポートをすることで、企画立案やマーケティングについての一連の流れを学ぶ。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働自主演習Ⅰにおいて、和歌山の主要産品である和歌山県のウメとカキを使った商品プロモーションをグループワークを中心に企画した。

また地域協働自主演習Ⅱでは、地域協働自主演習Ⅰで企画した加工品の商品化に向けた取り組みと 2 つに分かれ実習を行った。

ウメチームは、和大ブランドの梅酒・梅シロップのラベル開発を企画し、実際に自分たちで作ってみて、改良することで商品化にこぎつけた。カ



キチームは、干し柿をデザートに見立ててムスリムの人たちに売るためのマーケティングを行い、ムスリムの人たちの干し柿の捉え方を調査した上で企画提案を行った。

3. 課題と今後の展開

次年度は、各々の学生が個人でアグリビジネス事業者の下でインターンシップを行う。これまで学んできた知識・経験の全てを活かし、実習先の経営課題に応じて、6 次産業化ビジネスプラン作り、農商工連携プロジェクトの企画・調整、加工品・サービスの企画・試作を行う。自ら主体的にスケジュール管理等のプロジェクトマネジメントを行うことで 6 次産業化の現場でイノベーションを推進する一員となることを目的とする。

4. 学生/地域の声

試飲会で学長をはじめ多くの人々にのんで味わってもらって良かった。

家庭用品イノベーションプロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】海南市

【担当教員】藤田和史（経済学部准教授）

【協 働 先】海南市、海南特産家庭用品協同
組合、高田耕造商店、株式会社
サンコー



1. 事業概要・目的

海南市を中心とした家庭用品産業は、和歌山県の特色ある地場産業である。この家庭用品産業の歴史や現状を学修し、実際の企業の経営や具体的な製品技術開発を題材に、グループワークを進めていく。また、海南市の家庭用品まつりに参加し、家庭用品産業の普及活動についても学び、地場産業の振興をプロセス・プロダクト両面のイノベーションから促進できる人材を育成することが目標である。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナーにて、家庭用品産業の振興について学ぶため、株式会社サンコーの角谷社長から家庭用品産業の歴史と業界、流通体系などについても学ぶ機会を加えた。地域協働自主演習Ⅰにおいては、「学生生活でも使える家庭用品の企画」というテーマで商品の企画を行った。また地域協働自主演習Ⅱでは、既存のほうきに絡まるゴミについて調べ、どのような形態ならばゴミが取りやすいほうきかということを調べて発表した。

3. 課題と今後の展開

次年度は、これまで学習してきたことを基礎に、家庭用品企業、自治体、商工会議所等で製品・技術開発・生産の現場や企業支援に参画することを通じて、これらの業務で必要となる知見・技能を身につけることをめざす。また、得た成果を家庭用品まつりにおいて報告し、地場産業の普及にも積極的に取り組んでいく。

4. 学生/地域の声

自分たちでは考え付かないようなアイデアを学生たちが提案してきて驚いた。今後の商品開発のヒントにも繋がる。

地域づくり戦略構想プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】紀の川市

【担当教員】大浦由美（観光学部教授）

【協 働 先】紀の川市北長田地区

1. 事業概要・目的

県下の集落での地域づくりワークショップに参加し、地域の課題抽出、分析手法、ファシリテート能力の基礎を学んでいく。この地域づくりワークショップの結果から、地域の現状に即したビジネスプラン(イベントの構想)等を地域の人と一緒に考えることで、地域づくりの担い手となり、当事者意識を持った活動を行うことを目的とする。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働自主演習Ⅰにおいては、実際に地域づくりワークショップの技法を学ぶことを中心にグループワークを行い、和歌山大学を含めた和歌山市の資源地図作りを



行った。また地域協働自主演習Ⅱでは、紀の川市の北長田地区で聞き取り調査を行い、地域の課題の抽出や地域の良いところを探し、今後の活動提案を行った。

3. 課題と今後の展開

次年度も、地域づくりワークショップにおいて実行計画を策定した地域を中心に地域づくり活動の支援を行う予定である。年間で5～10回程度の継続的な活動を地域の自治会、農業法人、商工会議所、観光協会、NPO法人などと協働して行う。また、その地域で自分ができることを考え、個人単位でプランを作成し、地元での発表会を行う。

4. 学生/地域の声

継続した聞き取り調査をおこなうことで、地域課題が明確になり、ますます出来ることが増えていくのではないかと思った。

地域資源を生かした生業づくりとまちづくりプロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】九度山町

【担当教員】宮川智子

(システム工学部教授)

【協 働 先】九度山町、大阪市立大学



1. 事業概要・目的

九度山町をフィールドとして自然および歴史環境を生かしたまちづくりについて学ぶ。地域での暮らしと生活環境および地域資源について検討し、地域資源を生かすための提案を行うことを目的としている。本年度は、真田丸以外の九度山町の魅力の普及を目標として、フィールドワークを通じ、歴史環境と親しみながら、九度山町の活性化についてのプラン作成を行った。



2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナーにて九度山町教育委員会から、九度山町および高野山周辺地域の歴史について学ぶ機会を設けた。

地域協働自主演習Ⅱでは、真田丸以外の九度山町の魅力の普及を目標に、「九度山まちあるきプラン」と「外国人観光客向けの新しいマップ作り」、「真田紐の照会」の3つのテーマに分かれて活動を行った。各チームは現地で得た情報を元にテーマを提案した。

3. 課題と今後の展開

次年度以降もこれまで学んだ歴史的町並みや地域資源、および地域における課題について、インターンシップをとおして、地域資源に関する調査・記録によるデータ収集、観光ルート作成、商品開発・試行を行う予定である。

行政、観光事業者、公共機関等へのインターンシップを予定しており、①地域資源と周辺環境の記録を行う、②観光ルート作成と試行を主体的に行う、③商品開発・試行を地元住民と協働して行う、等を検討している。

4. 学生/地域の声

九度山町の活性化案を作るにあたり歴史についても深く学ぶことができた。

地方都市のまちなか再生プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】和歌山市

【担当教員】永瀬節治（観光学部准教授）

【協 働 先】和歌山市、北町トッテ

1. 事業概要・目的

和歌山市のまちなかに潜在する地域資源（公共空間、建物、歴史文化、生業・産業、イベント・活動等）を把握するとともに、それを具体的に活用することで、地域コミュニティを活性化させ、新たな人の動きを生み、エリアの価値を高めるための方策やプロジェクトを企画・構想する。提案された内容の一部は、関係組織との協力・連携のもとで実践し、その効果と実効性を検証する。

本年度は北町トッテ（市街地にある空き倉庫）の見学ツアーを企画し、2019年2月3日に実施した。

2. 取り組み内容



本年度は、地域協働自主演習Ⅰにおいて、「和歌山の地域資源探し」をテーマにグループワークを行った。また地域協働自主演習Ⅱでは、「北町トッテで恵方巻きを作るイベント」を実施した。

3. 課題と今後の展開

次年度は、和歌山市内でまちづくりに取り組む行政の関連部局や民間組織の協力を受け、関連プロジェクトを継続的に実践するインターンシッププログラムを実施する。

4. 学生/地域の声

倉庫の活用法や報告会の実施に半年間力を注いできた。参加者の楽しそうな顔を見たときは一安心だった。このような拠点を生かしていくために活動を続けたい。

宿泊業を中心とした着地型観光ビジネスプロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】かつらぎ町

【担当教員】木村亮介（クロスカル教育機構
教養・協働教育部門講師）

【協 働 先】古都里、
和歌山県、かつらぎ町

1. 事業概要・目的

和歌山県の観光客数は増加し続けており、特に外国人観光客（インバウンド）の増加が目覚ましい状況である。一方で、宿泊施設が不足している。また、過疎地域での人口減少に伴い、空き家（古民家）が増加していることを背景に、古民家を改装（リノベーション）し、ゲストハウスとして経営する取り組みも増えてきている。そこでは、単なる宿泊施設だけではなく、日本・和歌山・その地域ならではの体験ができるような空間づくりや「おもてなし」が求められている。このプロジェクトでは、観光分野において、古民家を活用したゲストハウスなどの宿泊業を中心に、地域に根差して着地型観光ビジネスで活躍できる人材の育成をめざす。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働自主演習Ⅱにおいて、かつらぎ町の宿泊体験施設について、ガレージを改装して新しい体験施設を作るというプロジェクトを行ったり、Instagram のフォロワーを多数獲得するための広報戦略を立案し実行した。



3. 課題と今後の展開

次年度は、実習先の経営課題に応じて、自分の経験・専門性などを活かして、解決策を検討・実行していく。宿泊プラン、外国人対応、地域観光、プロモーション、接客サービス、館内設備、従業員採用・定着、コスト削減等、自ら主体的にスケジュール管理を行いプロジェクトマネジメントを行う予定である。



4. 学生/地域の声

実際にガレージの改装の手伝いを行い、また宿の様子を広報戦略を考えながら Instagram に投稿することで、自分たちもゲストハウスの魅力をたかめる活動に参加してきたのだと感ずることが出来た。

美しい星空を生かした観光プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】みなべ町、紀美野町

【担当教員】尾久土正己（観光学部教授）、
佐藤祐介（クロスカル教育機
構 教養・協働教育部門講師）

【協 働 先】Starforest、紀美野町

1. 事業概要・目的

都市部の少ない和歌山県では、開発が進んでいないが、むしろ、多くの都市から失われてしまった、暗い夜空が残されている。そこで、和歌山県の夜空の魅力を生かした体験型プログラムを軸に、着地型観光ビジネスを企画実践する事によって、わかやまの自然環境をいかして地域活性化に取り組める人材を育成する。



2. 取り組み内容

本年度は、スタートアップセミナーと地域協働自主演習Ⅰにおいて学んだ内容を踏まえ、地域協働自主演習Ⅱでは、地域で活躍する公共天文台や、星空ガイドを生業とする着地型観光事業者とともに、実際のフィールドワークと天体観望会の実践をとおして、具体的な取り組みを企画・構想し、星空資



源を生かすための提案を行います。具体的な場所としては紀美野町のみさと天文台とみなべ町をフィールドとし、12月15日のスターパーティの際にたき火を企画した。

3. 課題と今後の展開

次年度は、引き続きみなべ町および紀美野町のフィールドで星空資源を生かしたフィールドワークを行っていく予定である。また、実際の観光協会などに星空観光を提案していくことも検討している。



4. 学生/地域の声

和歌山は何もない分、星がきれいだと感じた。ふたご座流星群では、焚き火企画を検討する時間があまり無かったのが大変だった。

公開討論会「卒業後に志した、わかやままでの地域活動と仕事」実施状況

日時：平成 30 年 12 月 21 日（金）15 時～16 時 20 分

場所：和歌山大学東 1 号館 G209 教室

目的：「わかやま未来学副専攻」の質的向上と学内の認知度向上に資するために、協働機関（他大学、他機関、自治体、地域など）や学生との「双方向の意見交換」を目的に行う。

概要：第 1 部ではわかやまに移住したゲスト 2 名に登壇いただき、和歌山での仕事と地域活動について講演が行われた。第 2 部ではゲストを含めたパネルディスカッションにより、わかやまでの仕事と暮らしについて会場の参加者もふくめて、議論をおこなった。

ゲスト：栗本製作所 小佐田正克

紀州技研工業 谷口 祐太

（和歌山大学ソーラーカープロジェクト OBOG チーム CABREO 所属）

参加者：本学教職員、一般、協働機関 合計 16 人



「U39-Re キャリアデザイン」東京開催 実施報告

◇目的：

和歌山大学を卒業し、社会で活躍する卒業生を対象として、キャリアの棚卸しを行うイベントを行う。そこで、卒業生のキャリア支援を行うとともに、わかやま未来塾の紹介・宣伝を行う事で、31 年度以降のわかやま未来塾の受講者を獲得することが目的である。

◇日時・場所

10 月 20 日(土) 16 時～18 時

東京・銀座 コワーキングスペース The SNACK

◇参加人数

和大卒業生 23 名 県庁職員 3 名 主催スタッフ 4 名 合計 30 名

◇結果概要

アンケートや実施中の聞き取りから、

1. メインとなるキャリアの棚卸しについては、ほとんどの参加者から良い反応を得られ、個々人の支援としては役だったと考えられる。
2. わかやま未来塾の試行と受講意向調査については、試行としては今回のワークは役に立つ内容といえた。しかし、受講意向の調査については、あまり有益な意見がえられなかった。なぜなら、今回の参加者はすでに東京に基盤があり、わかやまになんてものを求めて東京に出ているため、ここ 10 年のスパンでは今後わかやまに戻ってくるのが想定できないという雰囲気であったからである。（定年後には、という意見はみられた）

アンケートで得られた意見としては、求めるセミナー内容として「人的ネットワークが形成できるセミナー」「MBA のようなセミナー」「起業のためのセミナー」

「わかやまで生活している人の話」「先人たちの経験を知ることができるプログラム」などが挙げられた。



「U39-Re キャリアデザイン」大阪開催 実施報告

◇目的：

和歌山大学を卒業し、社会で活躍する卒業生を対象として、今年のライフイベントと仕事の棚卸しを行うイベントを行う。そこで、卒業生のキャリア支援を行うとともに、わかやま未来塾の紹介・宣伝を行う事で、31年度以降のわかやま未来塾の受講者を獲得することが目的である。

◇日時・場所

12月15日(土) 14時～16時

グランフロント大阪 北館 カンファレンスルーム B01

◇参加人数

和大学生 13名 主催スタッフ 3名 合計 16名

◇結果概要

アンケートや実施中の聞き取りから、

1. メインとなる今年の自分自身の棚卸しについては、ほとんどの参加者から良い反応を得られた。
2. わかやま未来塾の試行と受講意向調査については、試行としては今回のワークは役に立つ内容といえた。しかし、和歌山へ戻る意向の調査については、ほとんどの参加者から否定的な意見が出された。大阪で現に仕事を持つ人が和歌山へ移住することは何かの節目や家族の意向などの状況が無い限り難しいということであった。
3. 未来塾の開催形態については集中開催ではなく、定期的に開催する形式が良いという意見が多く得られた。



■大阪市立大学

地域との共同による QOL プロモーション演習活動（平成 30 年度）

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】海南市、紀の川市、紀美野町、九度山町、高野町、広川町、日高川町など

【担当教員】西川禎一（生活科学部教授）、所 道彦（生活科学部教授）

【協 働 先】和歌山社会経済研究所

1. 事業目的・概要

大阪市立大学では、食品・居住・福祉



の3つの分野で複合的な教育資源を有する生活科学部の学生が、生活者のQOL（生活の質）を高めるため、地域ニーズの把握を行い、地域とのパートナーシップのもと問題解決にあたる体験型実践演習を、継続的に実施している。

和歌山県下でも、この活動を実施しており、これにより学生が地域の課題を知り、解決し地域の方との交流を図ることを目的としている。

2. 取り組み内容

平成 30 年度も、和歌山県内各地に出向き、特産品である温州みかん、桃、柿、ハッサク、ビワ、イタドリ、イチゴ、クリなどの各種農作物の播種や植付け、摘蕾・摘果や間引き、収穫などの援農活動、収穫祭や地域のイベントなどのお手伝いを通じて、地域に密着し、地域の方との交流を図った。



3. 課題と今後の展開

学生が、地域に出向き地域の生活者の方とともに植付けから収穫までといった一連のプロセスを体験する学習であり、平成 30 年度も気象状況により、日程調整が困難だったが、土日なども活用し、実施してきた。生活問題の実態を把握し、地域の生活者と問題意識を共有しながら、QOL 向上につながる活動を検討して改善策を立案・実行するための演習なので、地域活性化にも反映できるよう、今後も継続的に展開していきたいと考える。

4. 学生/地域の声

学生：「農家さんと、今の農業やこれからの農業のことについて思いを語り合えることが楽しい」、「私たちが地域に入っていくことにより多くの方が元気になり、私たちも元気をいただいた」地域の方：「活動が広がるにつれ学生の力が大いに役立っている」、「新しい作物づくりや観光農園等にも取組んでいきたいので、若い人のアイディアを期待している」

わかやま未来学副専攻「プラスチック成形技術」見学・実習ツアー

＜大阪市立大学工学部ゼミ生と和歌山大学副専攻受講生が共同実習＞

- 【学 校 名】 大阪市立大学、和歌山大学
【活動地域】 大阪府和泉市
【担当教員】 堀邊英夫（工学部教授）
【協 働 先】 大阪産業技術研究所



1. 事業概要・目的

和歌山県海南市の日用品の多くはプラスチック製品で製造されており、この「高分子材料」の基礎を学び、実際に製造されている現場実習を行い、理解を深めることを目的として、平成30年度前期より和歌山大学、大阪市立大学、和歌山工業高等専門学校との化学関係の専門教員が講師として、「わかやま未来学副専攻」の地域専門科目群「プラスチック成形技術」が開講された。その一環の実習として、大阪市立大学工学部ゼミ生と和歌山大学の副専攻受講生が共同で、大阪産業技術研究所にお伺いし、見学・実習ツアーを行った。

2. 取り組み内容

大阪産業技術研究所で、所員の方の丁寧でわかりやすい説明を受け、プラスチック成形のろいろな製造工程、検査、試験、解析という一連のプロセスを両大学の学生たちが、実物を見て、触って、また一部加工して体験した。見学・体験終了後は、学生、教員、所員が交わり、製造工程現場での注意すべき点や「大阪



産業技術研究所の取組みについて」など今回のツアーで関心をもった内容をもとに積極的に意見交換が行われた。

3. 課題と今後の展開

今回、COC+事業の一環として、大阪産業技術研究所の協力を得て、現場での見学・実習ツアーを紀の国大学参加校間で学生の



交流も図り共同で実施できた。日程合わせが困難な部分はあるが、ものづくりの理解をより深めることができる貴重な体験であるので今後も継続できればと考える。

4. 学生/地域の声

学生からは、「普段見ることが少ない高性能な装置が多く、いろいろな成形技術による実際のプロセスが見られて、勉学の後押しとなった」大阪産業技術研究所からは、「学生に見てもらい、ものづくりの関心が高まることは嬉しく思う」との意見をいただいた。

紀の国大学3校と自治体が協働で「まち活ゼミナール」

＜御坊市でスタディツアー＞

【学 校 名】 大阪市立大学、
和歌山大学、和歌山工業高等専門学校

【活動地域】 御坊市

【担当教員】

生田英輔（生活科学部准教授）

佐伯大輔（文学部准教授）

【協 働 先】 御坊市



1. 事業概要・目的

御坊市で COC+連携事業の一環として、紀の国大学の3校（大阪市立大学、和歌山大学、和歌山工業高等専門学校）と御坊市の職員が「防災」、「観光」、「歴史」をテーマに学生、教職員、市の職員が共同で、まち歩きとワークショップを行い、まちを活性化するための企画を立案することを目的とした。

2. 取り組み内容

平成 28 年度より御坊市で実施した「コミュニティ防災」を今回「防災」、「観光」、「歴

史」の3つのテーマに広げそれぞれでチームを編成し、まち



を活性化するゼミナールとして実施した。紀の国大学3校の教員及び学生、御坊市防災対策課の職員ら合計 29 名が参加した。

【まち歩き】「防災」チームは、防災の課題と対策を学ぶスポットを、「観光」チームは、新旧混在したまちの魅力を見て歩き、「歴史」チームは、歴史ロマンの息づく街並みと、御坊にゆかりある人

物の見学をした。【ワークショップ】それぞれのテーマごとのチームで、まち歩きで得た課題や発見をもとにファシリテーターによる課題解決のスキルを学

びながら、活性化のアイデアを出し合い企画として立案した。その後、各チームの代表学生が発表し、意見交換により内容を共有した。



3. 課題と今後の展開

今回、ファシリテーションスキルを学びながら目標設定を明確にしたことにより、まちの活性化のための多くの興味深い企画が立案された。地元の御坊市と連携をとりつつ可能なものから実現へ取り組みたい。また学生同士の交流を図り、行政など地域の方とともに教育プログラムを展開できればと考える。

4. 学生/地域の声

現場を歩き、課題解決のスキルを学びながら地域の方とも話し合い、とても貴重な体験ができ、参加してよかった。

紀伊半島の地域再興の学修

(地域実践演習Ⅲ：御坊・日高川流域スタディツアーを実施)

- 【学 校 名】大阪市立大学
【活動地域】日高郡日高川町
【担当教員】水内俊雄(都市研究プラザ教授)
祖田亮次(文学部教授)
【協 働 先】寒川地区寄合会、寒川神社、
寒川区委員会、紀中森林組合、
日高川町生活研究グループ、
寒川ホタル保存会ほか

1. 事業概要・目的

大阪市立大学で取組んでいる副専攻導入科目である地域実践演習Ⅲ(地域福利)では、COC+事業への展開として、紀伊半島の地域再興をテーマとした学修を継続して行っている。平成30年度も、バラエティに富んだ地域性をもつ日高川町流域で日帰りフィールドワークを実施した。地方が持つ課題と再興に向け取組まれている状況を識り、地域の力に接し、それを具体的に

つかみ取ることを目的とした。

2. 取り組み内容

日高川流

域において独特の小世界的生活圏を有する寒川地区で、昨年度に地元の方から過去の住宅地図を利用して各世帯の異動や現状を確認した。今年度は、実際に各谷々に入り、下記のテーマについて紹介いただいた住民の方に取材活動を行った。1) 豊かな資源を利用した多品種生産の歴史を生産者から聞き取り、2) Iターン者の方で地域に定着されている方々の思いや



実践の聞き取り、3) 流通や祭りや古民家などを中心とした地域の歴史的資源のありようについて、関係者の語りを蓄積した。

3. 課題と今後の展開

人口減少と高齢化する

地域において、地元の方の生活力やUターン者/Iターン者が、地域の人口構成や地域力にどのような効果をもたらしたか、という点などの知見が得られた。その過程において、膨大な歴史に関する語りや伝承、新たな取り組みなどの一端にふれることができた。今後、この地域がもつ地域力・伝承が世代間へ伝わっていくかが課題であると考え、今後も継続して活動を実施する予定である。

4. 学生/地域の声

実際に足を運び地域の方と直接お話しをして、調べたことに対して見方が変わり、温度感が近づいてきたと思う。寒川地区の現状の厳しさも感じることに合わせ、私たちは寒川の自然の美しさや皆さんの温かさにも惹かれ、日本のかつてを支えていた生産・生活システムを感じた。



和歌山企業交流会「わかやま DAY」を開催

<和歌山の団体・企業様と学生が活発にコミュニケーション>

【学 校 名】 大阪市立大学

【活動地域】 大阪市立大学杉本キャンパス

【関 係 者】 吉村典久（商学部教授）

就職支援室、地域連携センター

【協 働 先】 株式会社インテリックス、紀州技研工業株式会社、株式会社紀陽銀行、株式会社島精機製作所、太洋工業株式会社、株式会社タカショー、和歌山県庁（記載：五十音順）

1. 事業概要・目的

学生に「わかやま」での働き方の関心を高めることを目的に、和歌山県庁及び和歌山県の主な企業に参加していただき、学生との交流会を開催した。



2. 取り組み内容

2018 年 11 月
28 日（水）5 時限
め、大阪市立大学
杉本キャンパス
の高原記念館で、
地域を限定した



集中キャリアセミナーとしての和歌山企業交流会「わかやま DAY」を開催した。前半をキャリアワークライフセミナーとして、和歌山県庁から講演いただき、合わせて和歌山県の企業特長について商学部の吉村教授からワンポイントコメントをいた

だき、理解を深めた。その座学の後、



後半は学生が各企業ブースへ巡回していくラウンドトーク形式でアクティブな交流会として実施された。

3. 課題と今後の展開

働き先が都会志向の傾向になっている状況の中、キャリア選択肢の一つとして、学生に「わかやま」に関心をもつ



てもらうための特別集中セミナーとして実施した。今後は、参加人数を増やしながら継続的に展開できればと考える。



4. 学生/地域の声

参加した学生からは、「今後のキャリアを考える上でよいきっかけとなった」、「和歌山のイメージがよくなった」、「和歌山で働く意識がでてきた」、「働いておられる社会人の方と話し合いができ、とてもいい経験ができよかった」、「もっとこのような機会を作って欲しい」などの意見があった。

紀伊半島の地域再興の学修を地域と協働で実施

-熊野川町、新宮市街でスタディツアー-

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】

新宮市（中心市街と旧熊野川町）

【担当教員】

水内俊雄（都市研究プラザ教授）

祖田亮次（文学部教授）

【協 働 先】

熊野川行政局、みつの地域活性化協議会、一般財団法人熊野川町ふれあい公社、NPO 高田、新宮市観光ガイドの会、株式会社食縁、三輪崎青年会、近畿大学水産研究所、新宮市児童館など

1. 事業概要・目的

大阪市立大学のCR(コミュニティ再生)副専攻授業であるアゴラセミナーⅠaの地域福利分野で、和歌山県の中山間地域である熊野川町と新宮市街で、地域が抱える課題と再興に向けた取り組み事例を学び、地域活性化の糸口に触れることを目的とした学修を行った。

2. 取り組み内容

(1) 旧熊野川町、

高田地区：

日本の長い歴史のルーツと豊かな自然のもと世界遺産の地であ

る一方、典型的高齢化、人口減少がみられ、かつ紀伊半島大害の傷跡も深い地域である。自然の恵みと災害やその復興をバネにして、地域の組織がうまく連携をとりながら、また新たな事業に取り組んで再興している状況を学んだ。

(2) 新宮市街：

世界遺産である神倉神社の登拝を通じて、地元ガイドの方から大逆事件の顕彰や中上健次の足跡を学ぶことで、地域の広くて深い、歴史・地理を知った。



また、豊かな海産を活用した六次産業に取り組まれている企業のビジネスモデル事例の見

学、さらに日本遺産である鯨踊りの伝承を見学、聴講し、地域の自然の活用と歴史が支える地域活性の一面も学んだ。



3. 課題と今後の展開

山の恵み、海の恵みを生かし、災害復興から地域活性へと取組まれている状況に直に触れ、今回、地元の協議会、NPO、市役所、観光ガイドの会などの地域と、本学の教員及び学生が参加し、地域との連携を図った協働事業が実施でき、好事例のプログラムとなった。次年度以降、紀の国大学連携校学生の相互交流も兼ねた展開ができればと考える。

4. 学生/地域の声

外国人観光客が大幅に増加していること、また、実際に来てみて、伝統と文化が根付いていることを身をもって体感し、新宮のもつ観光資源の豊かさに驚いた。この特長を日本内外に発信することによってさらに注目を集めることができる場所であると思う。

■大阪府立大学

平成 30 年度 和歌山大学 岸和田サテライトでの講義

地域・文化（アゴラセミナー I B）

【学 校 名】大阪府立大学

【活動地域】岸和田市

【担当教員】西田 正宏（代表教員）

【協 働 先】和歌山大学

＜講義日程・内容＞

【8月8日（水）】

1. ガイダンス

2. 自己紹介とディスカッション

（大阪府立大学 教授・西田 正宏）

3・4. 西国三十三箇所順礼 1300 年

ー関西の文化・観光資源としてー

（和歌山大学 准教授・大橋 直義）

【8月9日（木）】

1・2. 万葉集の勝地をめぐって

（和歌山大学 教授・菊川 恵三）

3・4. まちをあるく視点

（大阪府立大学 准教授・前川 真行）

【8月10日（金）】

1・2. 説話の地域性

（大阪府立大学 教授・田中 宗博）

3・4. いわゆる『名所図会』は地域再

生に有効な視点を提供するか

（大阪府立大学 教授・西田 正宏）

【8月21日（火）】

1・2・3. 学生によるまとめの発表

（大阪府立大学 教授・西田 正宏）

※全 15 コマ中、10 コマを市民に開放しました。

1. 事業概要・目的

和歌山県を中心にその周辺地域には、多くの文化資源が残っている。城は言うまでもなく、各地に伝わる伝承を記した碑や、寺社もそうであろう。名所図会のような文献に残されたこともまた「文化資源」と呼べるかもしれない。

これら「文化資源」がはたして、その地域を再生するために有効にはたらくであろうか。あるいは有効にはたらかせるためには、どのような方法が考えられるであろうか。以上のような視点から、さまざまな文化資源を取り上げ、その内実を知るとともに、その有効性について考察する。

2. 取り組み内容

「紀の国大学協議会単位互換制度」に資する科目として、本講義を開講しました。講義は、複数教員によるオムニバス形式の集中講義とし、和歌山大学の先生方にも、講義を行って頂き、本学、和歌山大学の学生が受講しました。



3. 課題と今後の展開

学生の発表は、総じて、自らの関わる地域に関して、新たな視点を導入しての地域活性化につながるイベント等について考えられており、おおむねアゴラセミナーとしての一定の基準に達した発表がなされたと思われる。

■ 摂南大学

すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト

【学 校 名】 摂南大学

【活動地域】 和歌山県西牟婁郡すさみ町

【担当教員】 浅野 英一（外国語学部外国語
学科／教授）

【協 働 先】 すさみ町役場（地域未来課）

和歌山県（移住定住推進課）

和歌山県西牟婁郡振興局（企画産業課）

など

1. 事業概要・目的

和歌山県すさみ町の過疎地域（中山間地の佐本地区）をフィールドとして、少子高齢化と過疎化を題材に、大学生が実施可能なプロジェクトを設定し、さまざまな支援活動や実証活動を行っています。

2. 取り組み内容

すさみ町で開催される大きなイベント（イノブータン王国建国祭、ビルフィッシュトーナメント、すさみケンケンかつお祭り・すさみサイクリングなど）の運営に参画しました。また、若者の人口減少により開催が途絶えていた伝統的行事の佐本川柱松祭りの継承などを目的に大学が所在する寝屋



川市周辺の小学生に、すさみ町の自然を体験してもらう3泊4日の「忍者キャンプ」を学生が企画・運営・管理をすべて担いました。すさみ町では、おおむね2か月に1

回の割合で本学学生が参画するイベントが行われます。



現地活動を集中的に行う必要があることから、各プログラムの1か月前からすさみ町役場の担当者と学生は綿密な打ち合わせを実施し、各行事が円滑に進むよう努めています。

3. 課題と今後の展開

和歌山県すさみ町には豊かな自然や歴史文化など、都市にはない多くの魅力（資源）があります。その資源を有効活用し、都市と田舎の「ヒト・モノ・カネ」がうまく循環する仕組みを作ることにより、お互いが共生するケースに発展させることを本プロジェクトの最終的な目標としています。そのため、今後もすさみ町で実施されるさまざまな行事の実施運営や佐本地区で特産化を目指すにんにくプロジェクトにかかわりながら、すさみ町の活性化の一翼を担いたいと考えています。

4. 学生の声

本プロジェクトをとおして、先読みする力やリスクマネジメント力、責任感を養うことができました。

由良町における地域ブランド開発プロジェクト

【学 校 名】摂南大学

【活動地域】和歌山県日高郡由良町

【担当教員】鶴坂 貴恵（経営学部経営情報
学科／教授）

【協 働 先】由良町役場、一般社団法人
白崎観光プラットフォーム

1. 事業概要・目的

本学が「大学のふるさと協定」を締結している和歌山県由良町の地域資源を使った商品等を開発し、販売につなげます。このことにより、由良町の交流人口を増加させるとともに、地域経済活性化の一助とすることをプロジェクトの目的としています。

そして本年度は和歌山県由良町を一人でも多くの方に知ってもらい、由良町ファンの獲得を最終目標とし、様々な取り組みを行いました。

2. 取り組み内容

①由良ファンづくりための取り組み

白崎海洋公園の道の駅の産品販売所の魅力向上を図るため、学生目線で実施し、品揃え、レイアウトの変更、POP掲示などに挑戦し、売上高アップに成功しました。また、インターネット上で由良町の魅力発信や産品購入ができるサイトを開発しました。

②由良町のゆるキャラ「ゆらの助」を活用した、由良町の知名度向上

「ゆらの助」を「ゆるキャラグランプリ」で優勝させる（多くの投票を獲得するため、ゆらの助を摂南大学の職員として出向させたほか、大学や由良

町で行われるイベントに積極的に参加してもらい、SNSで活動の様子を配信しました。こ

れらの取り組みを通して、

2年連続和歌山県下1位と

いう成果を残すことができました。



③若者目線で由良町の観光パンフレットを作成

学生目線で由良町の魅力を見出すとともに、一般の観光パンフレットと差別化するため学生の写真やコメントを入れるなどの工夫を行いました。和歌山県を直撃した台風の影響から一部のページ差し替えを余儀なくされるなどのトラブルもありましたが、連携先と綿密に協議したことで今年度にパンフレットを完成させることができました。



3. 課題と今後の展開

由良町最大の観光スポットである白崎海洋公園が、台風21号により甚大な被害を受けました。観光地の復興と観光産業の振興に寄与し、更なる地域経済活性化に取り組みます。

また、新たな仕組みを地域に定着させ、自立し持続可能な地域に変えることを地域貢献の1つの目標とし、学生の活動を通して、地元の人々の意識改革を行うことができればと考えています。

■和歌山工業高等専門学校

自走式トーイングマシンの製作

【学校名】和歌山工業高等専門学校

【活動地域】和歌山県紀の川市

【担当教員】古金谷圭三

(知能機械工学科/教授)

【協働先】ユーピーパラグライダースクール

1. 概要・目的

『乗り物に機能を付加して、災害時に役立つ物』を、という平成24年度に始まった大学間連携事業のフォローアップが継続されている中で、『自走式できるバイクに牽引装置が付けば、阪神大震災の時のような、車が入っていけない災害地で役立てられるのでは・・・』というアドバイスを、ユーピーパラグライダースクールの村井校長からいただいた。

これとは別に、一部のパラグライダースクールには、テイクオフ、ランディングの練習用に“トーイングマシン”が導入されている。ただし、これらは後輪がけん引ロープの巻取り用ドラムに改造されていて、自走ができないので、セッティングに無理があることが知られていた。

これらの事から、自走できるトーイングマシンがあれば、これら両方の課題を満足できるのではと提案を受けた。

2. 取り組み内容

バイクが自走可能であることが必須なので、コード巻取り用ドラムを製作して、

- 1) 走行時は、駆動輪である後輪に、巻取りドラムを接触させない。
- 2) 牽引時は、後輪に巻取り用ドラムを押し付け、駆動力を後輪から得られるよ

うにする。

この切換えを、レバーで行える機構とした。



巻取り用ドラム(後方から)

試作品のグライダートーイングの可否や運用について、スクールの村井校長にアドバイスをいただいた。



機構についてアドバイスを受ける

3. 課題と今後の展開

自走できる構造なので、グライダー牽引時に風向きが変わっても、配置換えがスムーズに行えると、好評であった。採用した牽引構造の特徴から、後輪のサスペンションが無いバイクを採用したが、50 ccのエンジン搭載の原付なので、エンジン出力が若干弱い可能性などが指摘された。

4. 学生/地域の声

学生は、卒研の一環として行った。高評価を頂いたことは、自信につながった。

海底微生物を採取するための装置の設計製作

【担当教員】古金谷圭三

(知能機械工学科/教授)

【協働先】日高振興局 管理保全課

1. 概要・目的

有用な微生物は、色々な環境に存在していることが知られている。海も例外ではなく、海底の土砂などから採取された微生物の利用も図られている。一般に、これらの採取は、浅い領域ではダイバーによって、より深い領域では水中ロボットによって行われている。ところが、ダイバーによる作業では窒素酔いやサメなどの危険性が、ロボットによる作業ではコストがかかることが、デメリットとなっている。

そこで、ダイバーが作業する水深領域に絞って、その領域で稼働する、低コストの海底土砂回収装置を設計・製作し、実際の微生物の利用までの段階を検証した。

2. 取り組み内容

設計・製作された回収装置は、以下の写真のものである。

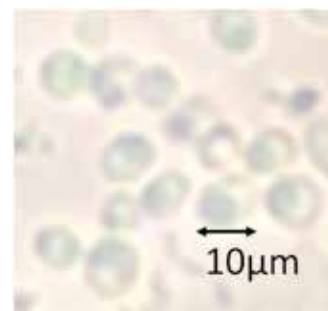


海中探査装置（日高港でのオペレーション）

20m水深まで稼働可能なカメラとマニピュレーターを備えている。日高振興局の許可を貰って、日高港・水深 14mの海底土

砂の回収を行った。この装置は、無線によるリモコン操縦ができる模型船となっていて、さらに手許の PC に海底画像や模型船の位置の GPS データが、送信されるようになっている。

ここで回収された海底の土砂から分離された、アルコール発酵を行う、パン製造ができた酵母が以下の酵母である。



分離された酵母菌

この酵母を使って、実際に焼いたパンは、ベーグルのような食感で、関係者で試食を行った。

3. 課題と今後の展開

無線の届く範囲が送信機から約 30m となっているので、より汎用性をもたせるためには、これ以上の遠距離での制御ができるような改良が必須と考えられる。

4. 学生/地域の声

学生は、卒研の一環としてこの装置の設計・製作を行った。この装置の動作確認だけでなく、最終的な成果物（この場合は“パン”）を得られたことに対して、関係者・地域の協力に感謝を示していた

地域ブランディング実践演習Ⅱ ～SNSを利用した観光客誘致作戦を展開しよう！～

【学 校 名】和歌山信愛女子短期大学

【活動地域】海南市・橋本市・高野町

【担当教員】伊藤宏（生活文化学科教授・
きょう育の和センターセンタ
ー長）

【協 働 先】和歌山大学・和歌山県・橋本市



1. 事業概要・目的

和歌山県内における数多くの潜在的魅力を広く伝えることを課題に、和歌山の資産を学生目線から掘り起こし、付加価値を加えて地域活性に繋げる地域ブランディングについて体験的に学ぶ。今年度はSNS、とくにInstagramを題材に、地域ブランディングの理論と事例を講義で学ぶと共に、いくつかの観光スポットに出向いてのフィールドワークを行う。さらに広報やプレゼンテーション等の手法を通して、地域課題を解決する意欲と、課題解決力・表現力の向上を目指す。

2. 取り組み内容



座学においてはメディア関係者、広告関係者をゲスト講師に招き、

2回に渡り地域ブランディングの実例と同じ情報でも発信のテクニックによって成果に大きな違いが出る事を重点的に学習した。教材として和歌山県観光振興課より県の観光促進に関する資料の提供も受けている。フィールドワ

ークにおいて高野山エリア・海南エリア・橋本エリアを3日に分けて現地調査を行った。道中では事前に調べ学習を行い現地では解説を実施し、地域毎のブランディング手法と実際の印象を考察した。SNSを利用した観光誘致にむけて素材撮影を各自積極的に行い、素材をSNSのグループ機能で共有することで後日の講義においてスムーズなディスカッションを可能にした。

3. 課題と今後の展開

幅広いフィールドワークとブランディング研究の結果、大きな視点で地域の魅力の掘り起こしについて考察し、取り組む事ができたが、反面目的に対する成果の具体性については、やや課題が残る結果となった。次年度に予定されている地域ブランディング実践演習Ⅲではより焦点を絞った実践演習と課題の達成を目指し、観光客誘致に向けた展開をする。

4. 学生/地域の声

地元に対する再発見・認識ができた。／友達に教えたい気持ちがわいた。／知らない事、知らなかった事を人に伝える方法を考えるきっかけになった。



地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)
わかやまの未来を切り拓く若者を育む“紀の国大学”の構築
平成30年度事業報告書

発	行	平成 31 年 3 月
編	集	紀の国大学協議会
問い合わせ先		和歌山大学COC+推進室
		〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷930
		TEL 073-457-7147
		FAX 073-457-8020
		http:// kinokuni-u.jp/